

子供たちに残したい 身近な自然



子供たちに残したい身近な自然



はじめに



東京都農業協同組合中央会

会長

加藤 信三

高度経済成長を支えてきた工業の発展は、物質的豊かさや便利さという面で大きなメリットをもたらしましたが、その反面、農地などの緑地や、武蔵野のなごりをとどめていた雑木林を次々に押しつぶしてしまい、宅地や工場用地として、コンクリートや鉄で固めてしまいました。

今、日本の国土を見ますと、どこまで行っても住宅が切れめなくつらなり、山の上の方にまで登りつめています。都心から、何時間かけたら、緑の広がる自然に出合う事が出来るのでしょうか。

狭い国土だからこそ、住宅地、農地、林地などがバランスを保っていないのではならないのです。しかし低成長期の今日でも、国は一戸建て持家政策を押し進め、家を持っていない事は人生のルールに乗り遅れたかのような風潮を生み出しそれによって私達が快適に過ごすために必要な質の高い環境は、悪化の一途をたどっているのが現状です。

このような工業優先から来た自然疎外の傾向は教育の場にも押し寄せています。動物や植物の飼育や栽培など生命を育てる実践を基調としていた教育が、現場の先生が悩むと悩まざるとにかかわらず、経済合理主義の基調の中で、効率とか効果といった企業経営的発想を取り入れざるを得ないような現況となっています。

自然と人間との関係を見失った発想は、人間の生理作用には、なにがしつくりこないものです。そのため成長期における子供達の心や体に知らず知らずの内に影響をあたえているといわれています。

そこで本書では、教育の場や子供達とのふれあいの場の中から常に子供達をとりまく問題について研究されている諸先生に、都市農業がそこにあることが、子供達にとってどのような役割を担っているかについて御執筆いただき、あわせて子供達の卒直な叫び、さらに東京農業が昔から自然の摂理を生かし今日までいかに人々の生活と結びついて来たかを併載いたしました。

子供達にとって、今なにが必要なのか、又子供達がなにを必要としているのか、すこやかな子供達の成長を考えるうえで、未来に大きな禍痕を残す事のないよう、最も身近にある、大きな自然を残してあげる事が、今私達のはたさなければならぬ役割ではないかと考え本書を作成した次第でございます。

目次

教育にとって農業とは何か 無着成恭……………8



現代の子育てにとって最も重要なことは、脳と手足のはたらきを統一して発達させることである。その方法のひとつとして、学校農園はきわめて有効な、作業及び学習を展開してくれるのである。

有情と無情の背中あわせ 邊見泰子……………16



私が幼い頃の《野原》とは、休耕地をも含めた畑をさしていました。畑とのふれあいが、都市の子供たちの自然——もしくは野生の生き物との交流事始めだったわけです。

農地と教育 長崎源之助……………36



子どもたちは、稲や野菜をつくることで、いろいろの観察をし、自然の神秘さを学びます。田んぼや畑が身近にあったら、子どもたちの成育にどんなに役立つかがわかります。

自然がもたらす豊かな子どももの心

深谷和子……………44



子どもが、自分の足で歩いて行ける範囲に自然があることが、いちばん望ましい。一日のうちたとえ数時間でも、自然と一体化して、自分をとり戻す。これがちいさい子どもたちにはぜひ必要だ。

都市農業と子どもたち 中川志郎……………52



その子が育つ環境こそ、最大の教師であるはず。豊かな土と緑を身近に持つことは、その意味でとても重要なことです。都会だからこそ、それがより多く必要なのです。

★たのしい草花あそび 邊見泰子……………22

★市民農園ガイド……………60

東京の花……………13

東京の野菜……………21

もし東京に大地震がおこったら……………41

東京農業の力強さ……………49

東京の畜産……………57

自然を残して 保谷市立東小学校五年 樋渡恵美……………26

健康的で心ゆたかな町に 豊島区立豊成小学校六年 辻 麻理……………28

僕の稲づくり 私立武蔵中学校二年 山中友之……………30

東京農業今昔——(1)……………14

東京農業今昔——(2)……………24

都市における市民菜園・みじかにある植物園……………34

自然の循環「土」……………42

もう一つの自然の循環「水」……………50

かけがえのない緑……………58

みちくさ

子供たちの声

ミニ情報

教育にとって 農業とは何か

無着成恭



無着成恭（私立明星学園小・中学校教頭）

ラジオでおなじみ「こども電話相談室」での明快な答えは大人にも人気があります。

主著には、「山びこ学校」があります。

わたし共の学校——東京都三鷹市にある明星学園小学校では、どの教室もすぐさま外へとびだせるように設計されている。外へとびだして、すぐ土をいじることができる。そこへ、二坪ほどの農園（？）をもっているからだ。

農園といったらおおげさだというのなら、学級花壇といってもいい。でも花だけ植えるわけではない。あるクラスは棉を植えている。あるクラスは、うんと深く堀って、大きなビニールを敷いて、中に泥をいれて、水田をつくっている。あるクラスは、秋から翌年にかけて麦をつくっている。

棉を植えているクラスは、棉の種を播いてから、棉の花が咲く（夏休み中）をとおりこして、コットン・ボールがはじけるのを観察し、ついには綿を収穫するところ、そして、糸につむぐところまでやる。水田をつくっているクラスは、もち米の苗を田植えして、餅をつくるところまでやる。

麦をつくっているクラスは、麦を収穫し、脱穀し、石臼で粉をひき、最後にはうどんづくり、パンづくりまでおこなう。

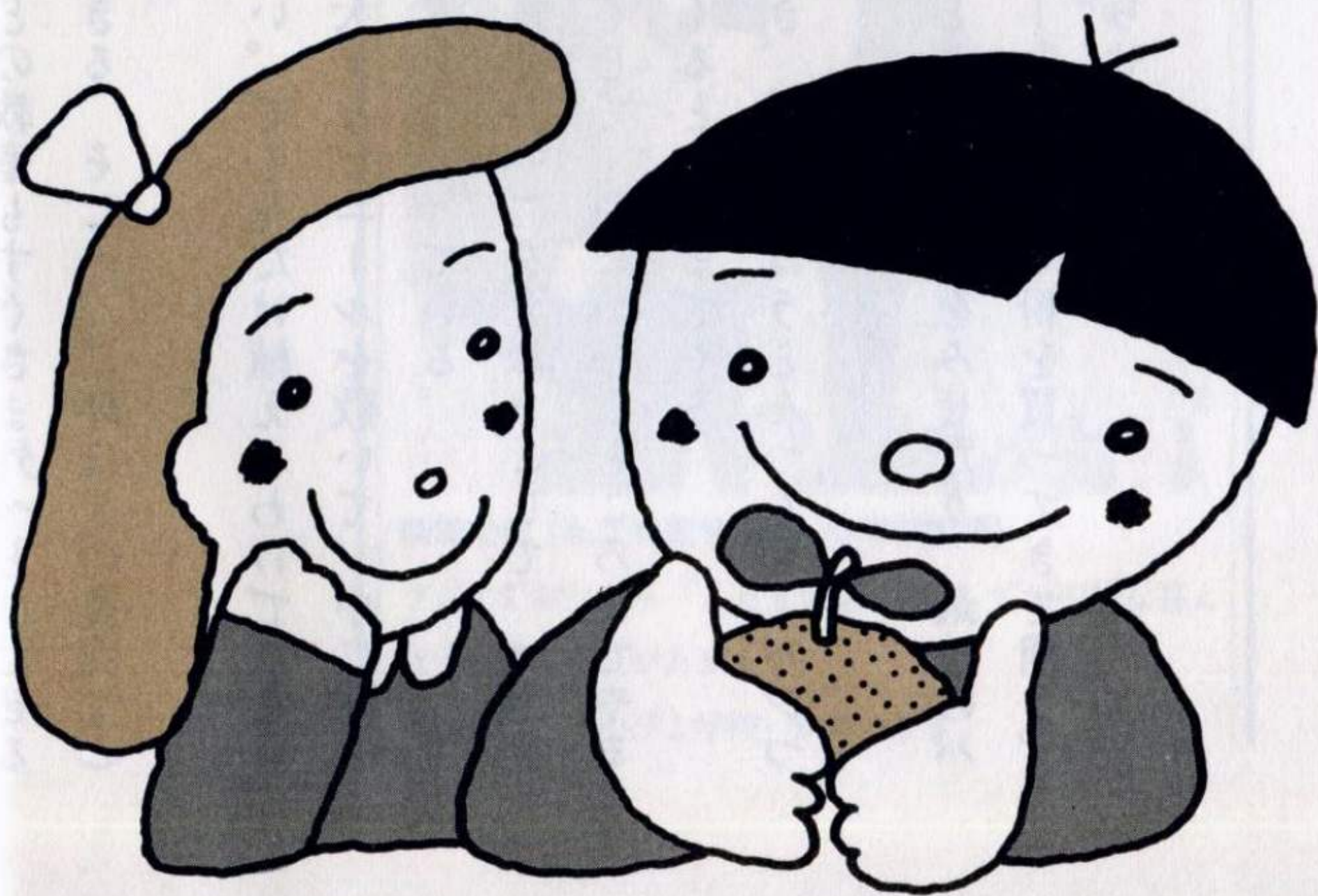
もちろん、小さな畑でとれる量はいささかだから、そのときそのとき大きな畑をみせたり、最後のパンづくり、うどん作りのときは石臼でひいた粉と同じ粉ですよ——といって、粉を買ってきて補う。

なぜ、こんな手のかかることを、そして、時間のかかることをやらせるのか。それは、人間が人間になり得た条件を経験させたいからである。

人間はどのようにして人間になったのか。

人間は、人間以外の他の一切の動物とちがうところは、自分が必要だと思う「物」を自分の手で創りだすというところにある。人間以外の動物は、自然にある「物」しか利用できない。人間だけが自然にはない物をつくりだす。

なにかんずく、木を切りたおし、根を掘りおこし、土を耕し、種を播き、肥料をやって育てて、熟させ、刈り穫り、それをいただく——という一連の、「切る」「たおす」「掘る」「けずる」「耕す」「折る」「曲げる」「播く」「育てる」「刈る」「むく」「つぶす」「つける」「にる」「あぶる」などなどの動作は、まさに人間の条件である。そういうことを子ども時代を経験させられなかった子どもの脳の発育は偏っている。競争を原理とするペーパーテストの点数を常に百点をとっているような子どもであればあるほど心に障害をもっている。つまり、人間としての基本的な態度が欠けたまままで成長する。



基本的な態度を別の角度からもあげておこう。

人間がかしこくなるというのは、経験的なレベルの知識と、学問的な科学的なレベルの知識がどのような因果関係で、その子ども（人間）の内部で統一しているのかという問題だ。

たとえば、トロロ汁を食べたとき、子どもはたいいてい頬っぺたにくっつけてかゆくなる。こういうことを経験した子どもは、「トロロが頬っぺたにくっつくとかゆくなる」という知識をもつ。

この知識は経験的なものだ。いいかえれば具体的なものだ。

それに対して、子どもは、「トロロが頬っぺたにくっつけばなぜかゆくなるのか？」と必ず質問をする。トロロが頬っぺたにくっつけばかゆくなるという事実から、「なぜかゆくなるのか？」というレベルの知識が抽象されてくるのだが、これは、学問的に、科学的にトロロを分析しなければわからないことだ。それを、学問という。学問とはこのように、必ず現象的なもの、具体的なものを踏まえて成立する。くどくどと、もう一度いえば、トロロが頬っぺたにくっつくとかゆくなる——という具体的な、経験的な知識と、なぜかゆくなるのか——という学問的、科学的に抽象された知識とが、その子ども（人間）の内部で見事に統一されたとき、その人間は、より一層レベルの高い人間になるのだ。

人間の無限の可能性というのはそういうことだ。逆に、トロロが頬っぺたにくっつくとかゆくなるから、かゆくならないように上手に食べることはか



「東京の花」

東京の花の生産額は、昭和54年には48億8千四百万円もあり都内の農産物総生産額の11.4%を占め、野菜・畜産と並んで主要な位置を占めています。日本国内の花の総生産額は千3百90億7千万円で、その内3.5%を東京の花が占めている事になります。

東京で生産される花はシクラメンやポットマム・洋らんなどの鉢物が多く全体の55%、バラやカーネーションなどの切花が40%となっています。

り発達させると、その人間は、人間としてレベルの高くなることを停止し、レベルの低い通俗的な人間になってしまう。そういう人間のことを、「こども」に対して「おとな」という。「おとな」とは、質問することをやめた人間のことである。なぜかゆくなるかを疑問にさえもたず、かゆくならない方法だけを発達させる人種のことだ。

子どもに畑や田んぼをつくらせてみなければならぬということや、そのときの子どものおどろきを素直に受け入れてやらなければならないということの意味はここにある。

日本は昭和36年以来の高度経済成長政策のため、農業を軽視してきた。そのことのつけは、教育荒廃というすがたで現象している。ナメクジに塩をふりかけるとちぢむ——などということを先生に聞き、それをうのみにして、自分ではやってみない子どもがふえた。そういう子どもは、「ナメクジに塩をふりかけるとちぢむって聞いたんだけど、そんなら砂糖をふりかけるとふくらむか？」なんて質問するようになった。

そういう子どもには、「ナメクジとはこれだ」と見せるところからはじめなくてはならない。

現代の子育てにとって最も重要なことは、脳のはたらきと、手足のはたらきを統一して発達させることである。その方法のひとつとして、学校農園はきわめて有効な、しかも重要な作業及び学習を展開してくれるのである。

(むちやく せいきょう)

私たちの町は、今ビルがたちならんでいます、
むかしは、ここで野菜が作られていたそうです。

「むかしの人たちのようすをしらべる」 小学三年社会

東京農業今昔 (1)

起伏に富む山間から流れてた川が、ゆっくり蛇行しながら、葦が繁り都鳥が群れる江戸海の入江にそそいでいました。そんなのどかな江戸も、徳川家康が交通の要所として江戸に幕府を移したあたりから、急激に大きな都市へと発展していったのです。

元禄八年(一六九五年)には、町人三五万、武家四十万、寺社方五万、計八十万人の大都会にふくれあがっていました。当時、パリ、ロンドンの人口が十数万人程度であったといわれている事から考えると、世界中でもケタはずれの大都市であったということがわかります。

人口の増加に伴って、江戸は多くの都市問題をかかえることになりましたが、食料の問題は特に深刻でした。上方商人達が、油、酒、味噌、醤油などを持ち込んで商いをはじめましたが、生鮮野菜の供給は新開地のため、限界があり、需要をまかないきれないのが現状でした。

大名や旗本諸家はこのようなことから、野菜を自給しようと、屋敷内に菜園を作りはじめました。江戸城の中でも、本丸、西丸、山里、吹上にそれぞれ菜園があり、近郷中野村(中野区)の名主が代々ナス苗を納入したという記録が残っています。こうした領主層の野菜栽培への関心が近在農家の栽培技術向上に刺激を与えたといわれています。

主食の穀物生産が主体であった、江戸近在の農家も年とともに、自家消費だけでなく、都市向け換金作物として野菜を生産し、江戸町内に売りにでることが増えてきました。

江戸時代の野菜作りは、荒川流域の低湿地帯、砂村を中心とする江東地域と大田・世田谷の城南地域が盛んでネギ、カボチャ、ダイコン、ナス、キュウリ、漬け菜などの生産が行なわれていました。

当時の野菜産地として名が残っているものに、亀戸ダイコン・砂村ネギ(江東)、矢切りダイコン・葛西のレンコン・金町コカブ(葛飾)、寺島ナス・本所ウリ(墨田)、谷中のショウガ(台東)、千住ネギ・汐入ダイコン・三河島菜(荒川)、小松菜(江戸川)、滝野川ニンジン・ゴボウ(北)、志村美濃早生ダイコン(板橋)、練馬ダイコン(練馬)、駒込ナス・巣鴨コカブ・雑子ケ谷カボチャ(豊島)、淀橋菊座カボチャ・落合キュウリ・四谷のトウガラシ・早稲田のミョウガ(新宿)、千駄ヶ谷のトウモロコシ(渋谷)、目黒のタケノコ(目黒)、大崎居木橋カボチャ(品川)、馬込キュウリ(大田)、大倉ダイコン(世田谷)などです。野菜以外にも王子(北)ではお茶、多摩川の河口近く羽田や六郷あたりでは、桃、梨、生梅など盛んに栽培されていました。

このような産地を育てていた肥沃な黒土は、今日、コンクリートと鉄の下に永遠に埋没してしまったのです。

大根売り

練馬大根は江戸時代から有名で、早生もの(秋止り)は肉質が柔らかく、美味で、浅漬けや煮物に適し、晩生もの(細尻)は皮薄く色白く乾き易いため沢庵に適している。デーコ、デーコと沢庵大根を売り歩く。



トウナス売り

当時作られていたトウナス(カボチャ)は、縮緬種と菊座種に大別されている。これは菊座トウナスの裁売り(必要な分だけ切って売る)、路地に荷をおろし長屋のかみさん達に声をかける。



ウリ売り

淀橋成子坂(西新宿)には、将軍家御用の真桑瓜畑があった、このウリ売りは江戸近郷、本所(墨田)あたりから来た農家の女房と娘であろう「瓜売り」が瓜売りに来て瓜売り残り瓜売り帰る瓜売りの声



有情と無情の

背中あわせ

へんみ
泰子



邊見泰子（写真家：フリーランサー）

主として子供や植物・風土文化を撮る。また、各地につたわる草花遊びを紹介するなど、植物研究家としても活躍。著書には、写真集「草花遊び全科」「母と子のたのしい草花あそび」などがあります。

「キジがいる」と叫ぶなり、急に彼は車を止めました。視線をたどると、トラックがしきりなしになりながら往き交う青梅街道沿いの空き地を見つめています。休耕地なのでしょう。竹の支柱がまっ直に、斜めに、今にも倒れんばかりに、てんでに立っています。ゴールデン・ウィークあけのこととて、勢い盛んに伸びる若草色の草むらは深々としています。

支柱と新緑の草むらの間に、赤いビロードの仮面をかぶったような鳥の顔がのぞいているのが、やつと目に入りました。紛れもなく、キジの雄です。街道から、わずか十数米ほど入った草むらに佇んでいるのです。私は間もなく、キジの飛びたつ雄姿を見られるとばかり期待して、見守っていました。

ところが、逃げる気配は見られません。草むらを抜け、すぐ隣の民家に並ぶジャガイモ畑へと悠然と歩いてゆきます。車を、キジの歩みにあわせて、バックさせました。私たちのことなど、一向に気に留めていないかのようです。

彼は車からそっと降りたつと、三脚を構えて写しはじめました。とまどいながら、近づいてもゆきませんでした。キジ氏は意にも介さぬようすです。ジャガイモ畑と休耕地の境を餌をついばみながら、ゆったりとめぐっています。

こぬか雨に黒く濡れるジャガイモ畑の、手入れのゆき届いた土にはあさる餌が少ないのでしょうか。休耕地に繁る草むらの方が格好の食糧庫なのかもしれません。

いつの間にか彼は十米ほどの至近距離にいました。こんなにおっとりした風格の持ち主とは千載一遇なのでしよう。シャッターを切り続けています。もしかしたら、飼育場でも思いました。でも、脚にバンドはついていません。どうやら生っ粋の野生のようです。歩道には、傘をさす通勤、通学の人たちが往来しているのですが、離れようとしません。さすがに彼は動物写真家です。



「抱卵中なんだ！時々、鋭い声で啼くでしょう。あれは、多分、卵を抱いている雌に、この通り近くに
いるよ、護衛しているよって、安心させるサインとちがうかなあ……」

あの畑のまん中、ひとときわこんもりと繁る草むらには巣が営まれているのにちがいません。キジ
紳士は、その周辺をさつきからゆったりとめぐり、潜望鏡のように草むらから首を出し、あたりを警戒
していたわけです。何の変哲もない荒れた畑が、にわかに神聖に見えたものでした。

今こうして、青梅街道沿いの畑に見かけた、キジの夫婦と雛たちの営みを想像するうち、ふと、幼い
日が想い出されます。

小学一年生の頃です。当時流行っていたのですが、私も兎を飼っていました。私の住んでいた街では
畑や野原は鉄道の向こう側にありました。踏切をこえて、兎の餌用の草刈り——というよりは草むしり
に行きました。土曜日の午下がり、近所の大学生のお兄さんが、私たちを連れていってくれました。ス
ズメノテッポウやカラスノエンドウ、時には麦の穂の草笛、オオバコの花茎を引きあう相撲、クローバ
ーの花輪、ネコジャラシことエノコログサの穂の毛虫などで遊んだのも、この兎の草むしりに出た畑や
道端でした。

開かずの踏切には歩道橋が架かり、今や、すっかり住宅地に変わったようですが、私たちはその頃、
駅の向こう側を、通称《野原》と呼んでいました。



「東京の野菜」

東京で生産されている野菜が市場で占める割合が非常に高くなっています。

特にツマミナ、コマツナ、タカナ、など鮮度が重視される野菜のほか、ウド、ワケギ、カリフラワーなどは、中央卸売市場の入荷量で全国の大産地を押し、ゆうゆう1位になっています。

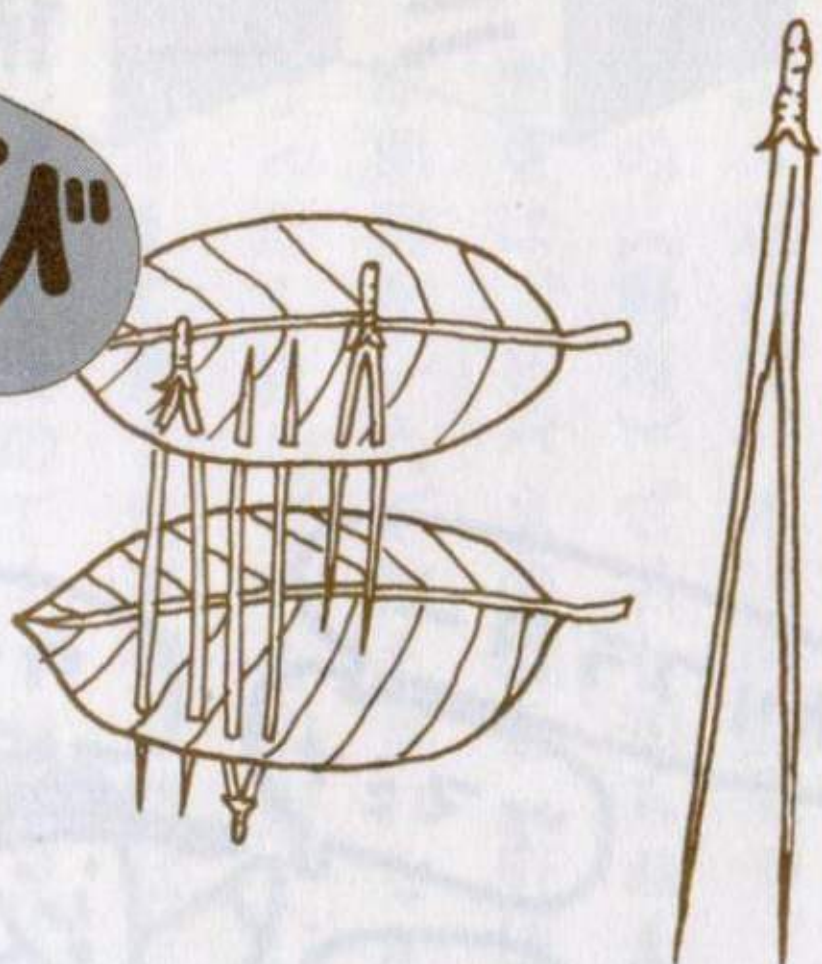
また、東京農業の特色は消費地の中にあるということですから、市場に出荷される以外にもたくさんの野菜が畑から食卓に直接とどけられているのです。

ふり返れば、本当の野原や、森を知らない街の子の触れ得る、精いっぱい自然だったのでしょう。その《野原》で名も知らぬままに、草花と遊びました。とりわけ、鳥では、ヒバリをよく見ました。悪童は、ヒバリの雛を《野原》からかすめとってきて、飼っていました。罪悪感を一人で抱えきれなかったのでしょうか、私もおすそわけに預かったことがあります。一人前になったら放してやる約束で、ヒバリ籠を、まだ初毛もろくに生えきらない雛のために買ってもらいました。すりえて育てた赤裸の雛は、天井の網にぶつかると飛べるようになりました。もうひとかどの若者に成長したのです。目が見えるようになった時から、まるで私や弟を親のように思っていたのでしょう。私たちも《野原》へ帰す日を一日延ばしにしていました。そんな矢先、猫の爪にかかって死んでしまったのです。想えば、遊んで飽きた果てに、打ちすてられた草花の姿が、心に焼きついたのも、その頃だったような気がします。

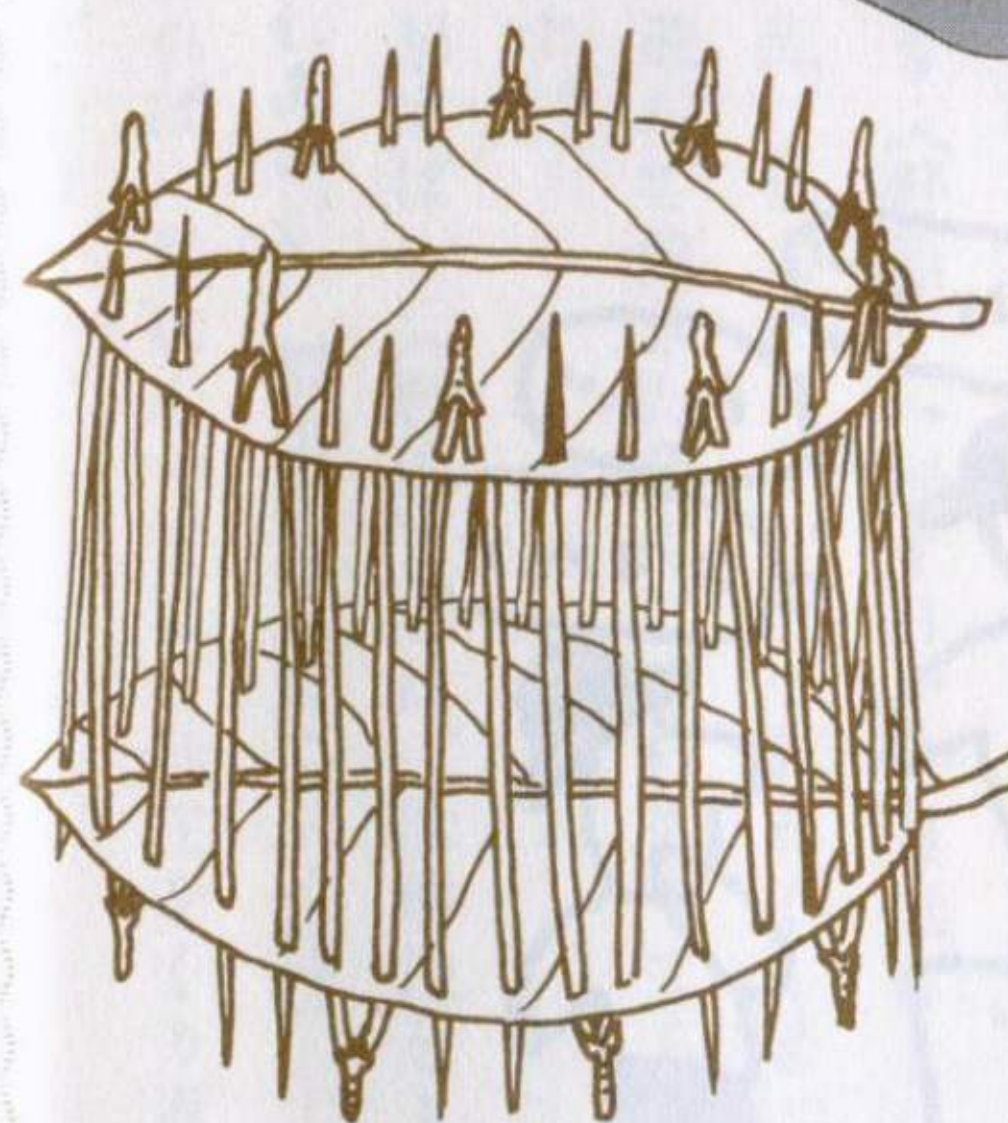
今にして想えば、《野原》とは、休耕地をも含めた畑をさしていたことに、想いあたります。畑とのふれあいが、都市の子供たちの自然——もしくは、野生の生き物との交流事始めだったわけですから、いいかえれば、私にとっては、殺生をくり返した、無情と有情の背中あわせの地でもあったといえるのではないのでしょうか。

草花あそび

マツの葉と木の葉の虫かご

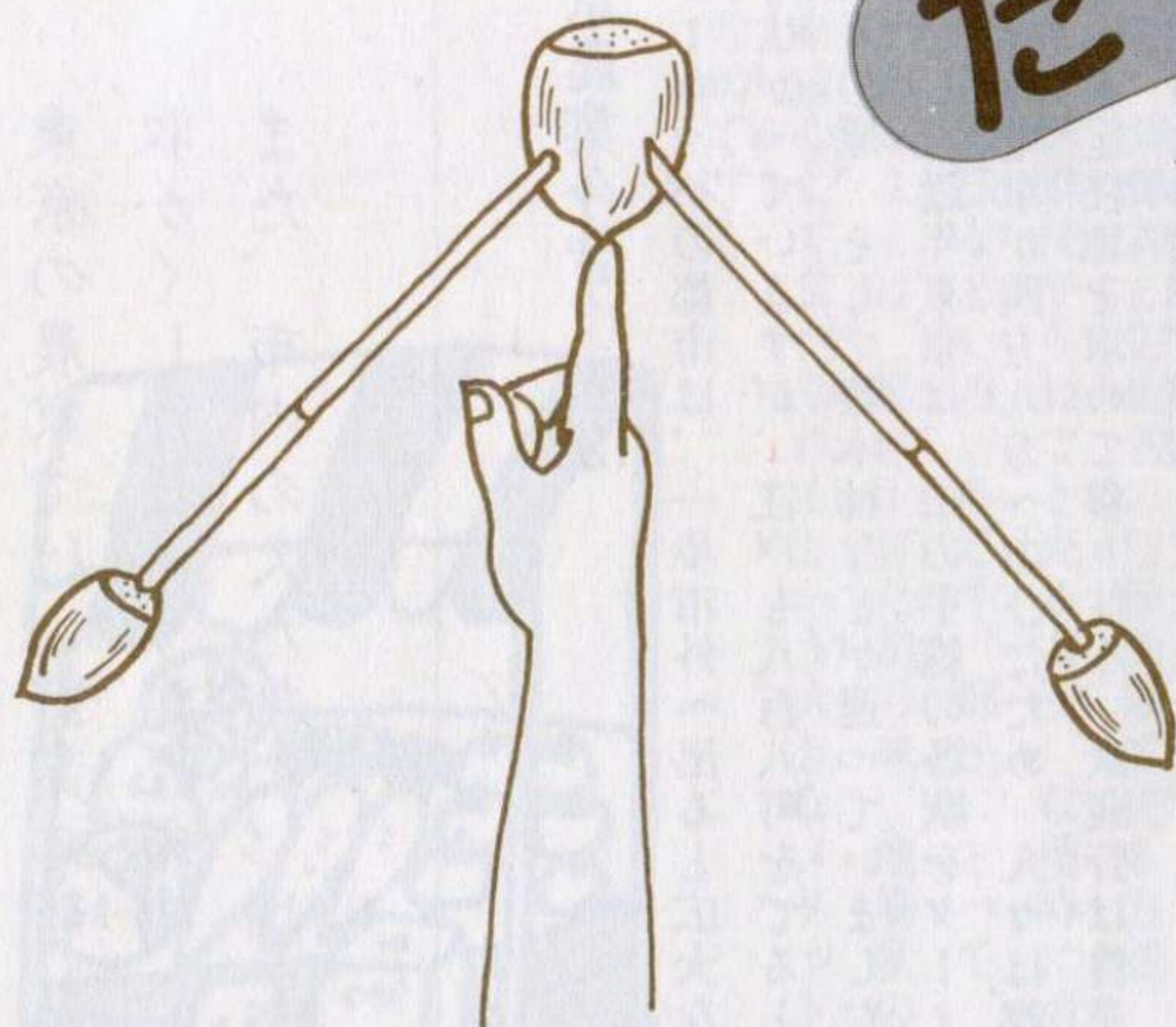


上下の葉は、同じくらの木の葉を2枚用意する。おりは、本一対のマツ葉をさす。マツ葉は、たがいちがい、上と下からさしていく。



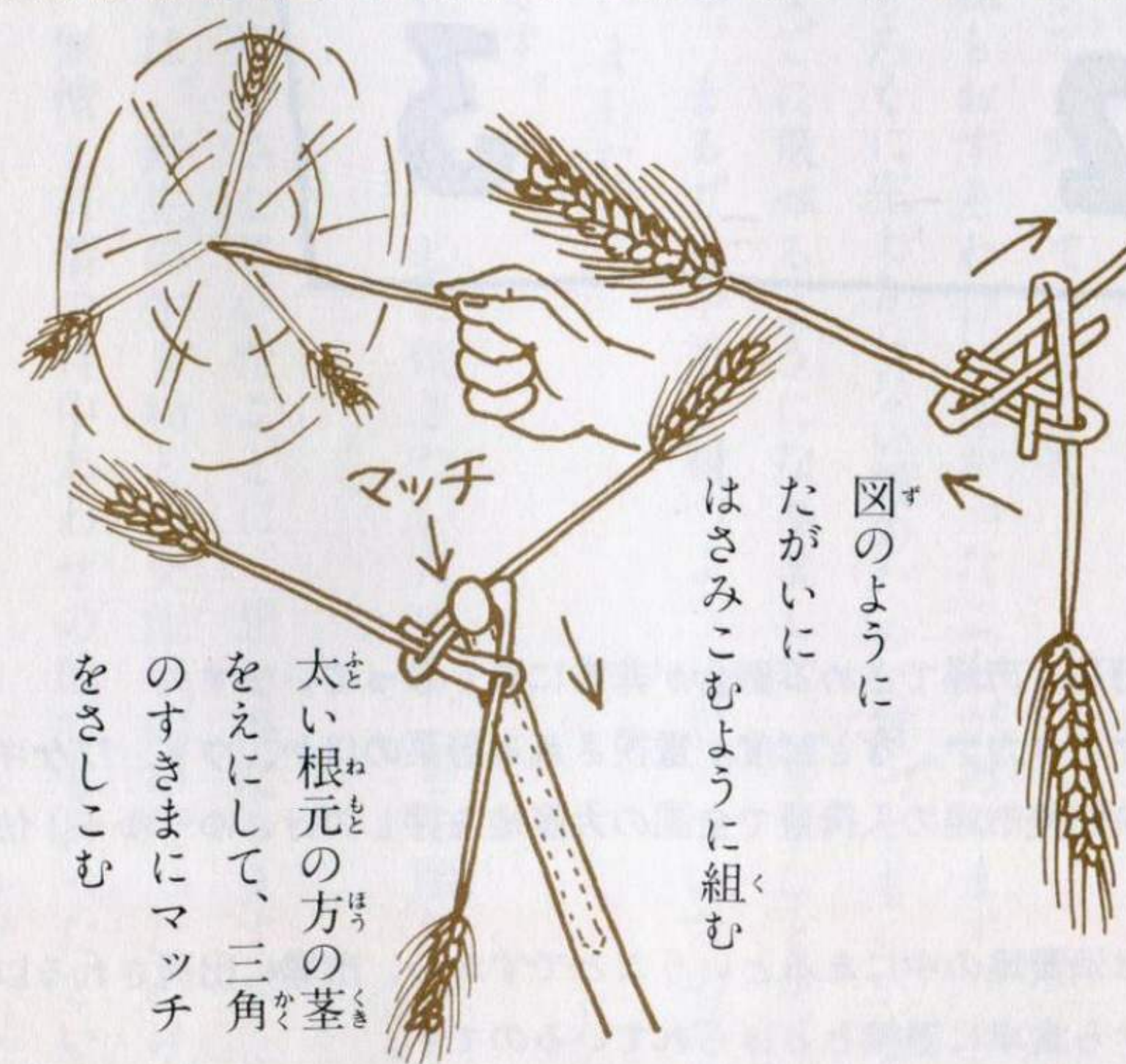
ドンダリのやじろべえ

ドンダリが割れないように錐か釘で穴をあけ、ササの小枝の端を鋭く斜めに切り落とし、ドンダリの穴にさしこむ。(さしこむ部分に接着剤をつけると、しつかりする)



ムギの穂の風車

かり入れごろの、かれたムギの穂なるべく黒穂を使う

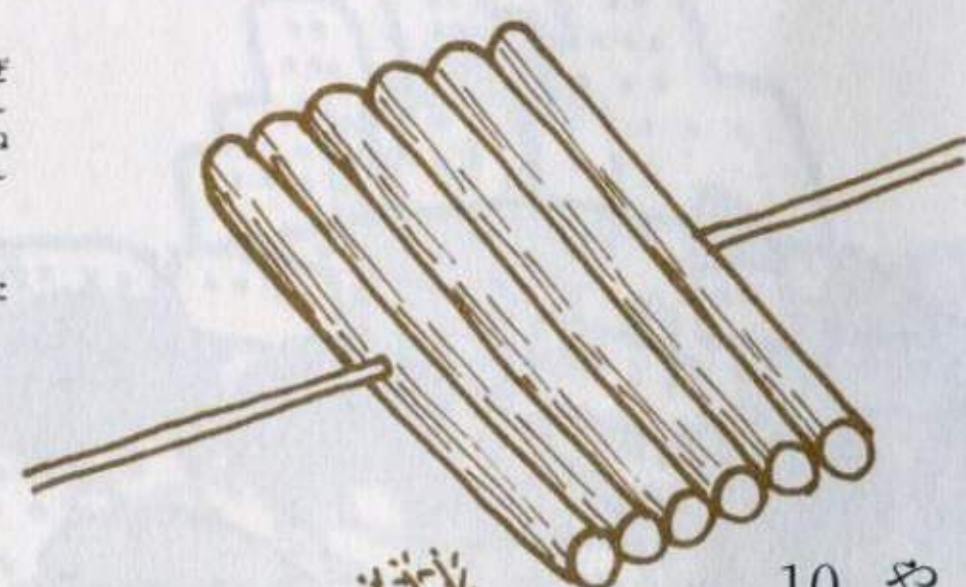


図のようにたがいはさみこむように組む

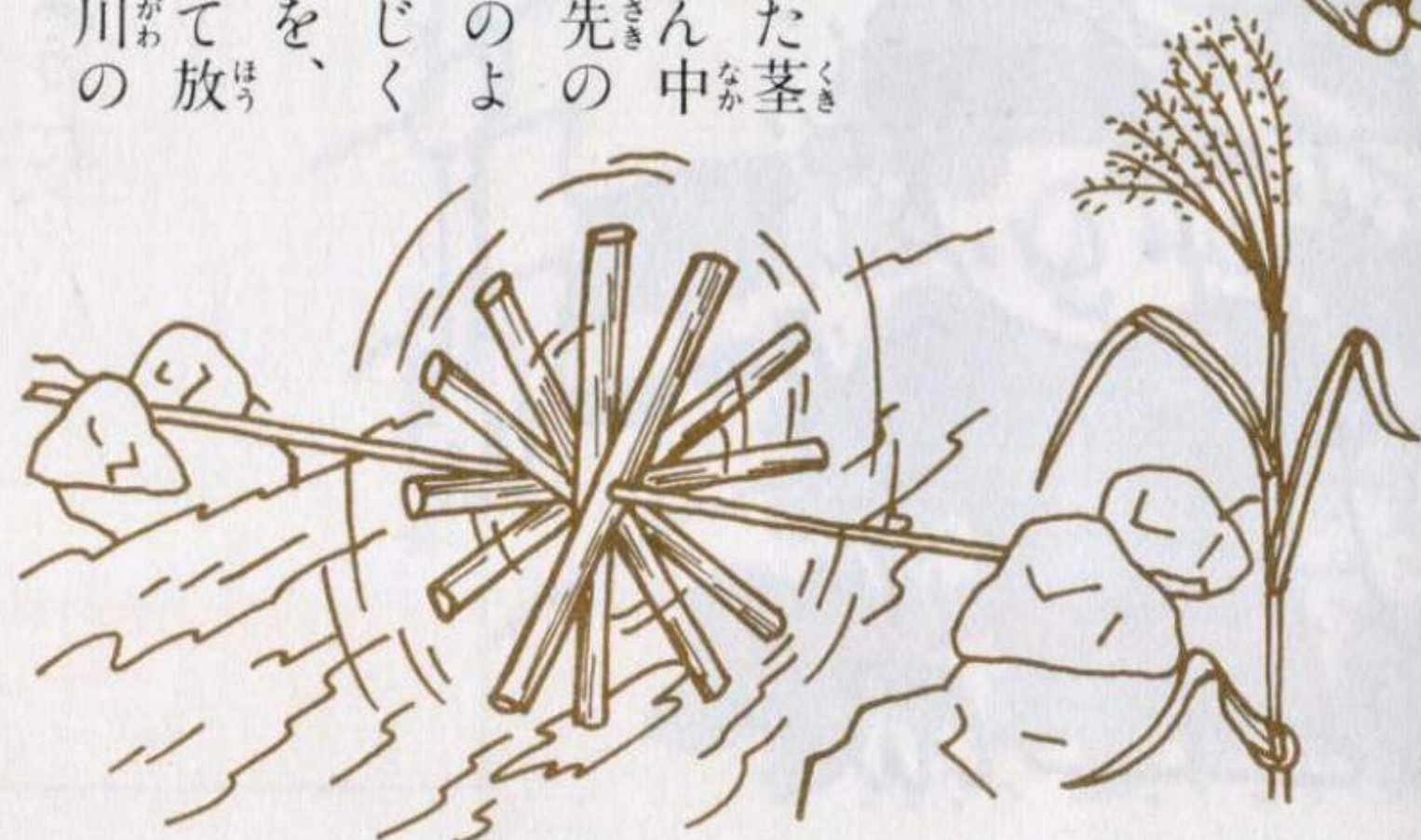
太い根元の方の茎をえにして、三角のすきまにマッチをさしこむ

ススキの水車

やや太めの、元の方の茎を、10〜13センチくらい



前年の立ちがれた茎を使う。茎のまん中に穴をあけ、穂先の細い茎を、くしのようにさして回転できるようにする。短い茎を、それぞれずらして放射状に整え、小川の流れにかける。



東京の農家では、野菜の新せんさがなくならないように、
 収かくした日のうちに市場へもつていきます。
 また、市内の人たちに、畑で売ることもあります。

「野菜づくりの農家」 小学五年社会

東京農業今昔——(2)

ヨーロッパの都市は、一步市外へ出ると広大な農地が
 今も広がっていますが、江戸も八百八町をでると田園や
 ススキの原、そして雑木林などが連っていました。

しかし、近年東京は、山の手線の各駅をターミナルと
 する郊外電車が四方八方へのびたため、人々は都市から
 郊外へと定住地を求めて移り住み、武蔵野は農業と住宅
 とが混り合った形で発展してきました。

江戸時代から、都市近郊農業といわれた東京の農業形
 態も今や、都市のまっただ中農業、いわゆる都市農業と
 呼ばれるようになりました。

都市農業は、消費者と農家が隣り合せて住んでいるた
 め、農家は消費者の嗜好に合った野菜を作ろうと汗水た
 らしてせっせとはげんでいます。奥多摩など山間部のワ
 サビ、コンニャク、シイタケ、多摩地区の丘陵部ではダ
 イコン、ハクサイ、ニンジン、都市部周辺ではキャベツ、
 コマツナ、ホウレンソウ、小笠原など島からはバナナ、
 パパイア、キヌサヤエンドウなどが生産出荷され、日本
 農業の縮図のようにありとあらゆるものが生産されてい
 るのです。

また、その販売方法も多岐にわたっています。たとえ
 ば、市場に出荷する以外に、農家が畑や庭先で泥付き野
 菜を直接売る方法、無人のスタンドに野菜とお金入れを
 置いて、消費者と生産者の信頼関係で売る方法、収穫を
 見込んで株単位やうねごと売る方法、収穫時に消費者が
 もぎとる方法などいろいろです。都民にとって、そこに
 農業があることは、忘れかけた旬の味、地場産の新鮮な
 野菜を安心して食べられるという大きなメリットがある
 ことなのです。



自然を残して

保谷市立東小学校 五年 樋渡 恵美

私には、広い公園を作るゆめがあります。そこには、山があり、谷があり、木がたくさん生えていて、野草や花も、いっぱいに生えているのです。もちろん、広い原っぱもあります。その中で、私たちは、思いつき走り回って遊ぶのです。

私の家の近くに、教育大学のグラウンドがあります。お母さんが、

「グラウンドに、中学校と、市民会館ができるようよ。」

と、言いました。私は、

「あまった所に、ビルを建てちゃうの？」

と聞いたら、

「だから、そこには自然のまま、残しておくように運動しているのよ。」

と、言いました。私は、ほっとしました。私たちにとって、あそこは、重大な場所なのです。くりの木があり、秋には、それを取って来たこともありました。友だちと、たくさん取ったのに、全部虫食いだっただこともあったっけ……。中学校と、市民会館を建てて、おまけに、ビルまで建ったら、私たちは、どうなるんだろう。あそこは、きれいな花がさき、学生さんがマラソンし、子どもたちが、走り回っているすが

たが、いちばん合っていると思います。

こんなこともありました。私が前に住んでいた小金井ではうちのすぐ前に、五日市街道と、玉川上水がありました。玉川上水の土手には、ほたるぶくろ、わらびなどが、たくさん生えていました。きつと、いぬのふぐりもさいていたでしょう。さくらなみ木が、はい気ガスのため、くるいざきになった時もあり、新聞に出たこともありました。

自然で、大事なんだなと、つくづく思います。大人の中には、

「道路だ、自動車だ、ビルだ、マンションだ。」

としか考えない人もいるけれど……。

はい気ガスの中で、あくせくらすより、自然の空気を思いっきりすって、のびのびとくらしの方が、とてもいいと思います。心も大きく広がって、やさしくなるでしょう……きつと。

だから、東京にある山々も、川も、木も、花も草も、みんな、私たちのために、ぜったに残しておいて！。

健康的で心ゆたかな町に

豊島区立豊成小学校 六年 辻 麻理

私達の住んでいる池袋、大塚周辺は、とても生活するのに便利な所です。最近サンシャインシティも近くに出来ました。サンシャインが出きたばかりの時は、何だか自分たちの町が一段と立派になったような気がして、遠くの友だちなどに、「いいでしょ。サンシャイン六十なんて歩いてすぐなのヨ。」なんて、自慢していました。本当に高速道路から見たサンシャインシティ一帯の夜景などは、まるで外国の町のように、見た目とても立派で豊かな町に見えると思います。サンシャインシティの中には、デパート、レストラン、展望台、劇場、水族館、プラネタリウムなどがあります。確かに最初は、物めずらしいのもあって、何度も行きました。そして、そのたびに、だいたいお金も使ってしまった。プラネタリウムや水族館などは、私達子供にとっても、とても魅力のあるものでうれしいのですが、よく考えて見ると、お金を使わないで楽しむ事ができるものは、何一つとしてないのです。あれだけの広い土地があったのなら、例えば、森林公園のような大きな公園、運動広場、テニスコート、野球場、アスレチックなど、何でもできたのに。今は、日曜日、家族と一緒に思いきり体を動かして健康的な一日を過ごしたいと思うと、長い時間電車に乗ってやっとたどりつくという有様。本当にこの辺には、広くて木が一杯いしげっている遊び場なんてないんです。

ああ、サンシャインが大きな緑一帯の公園だったらなあ。田舎のない私なんて、都会の真中にいても、心の中では、いつも田舎の自然を求めて、あこがれています。そして誰でもそうでしょう、花や木を見るとなんとなく、心が洗われるような気がしてきます。

私は、五年の時、社会科で初めて工業の発展の影にいろいろな公害が起きている事を知り、ショックを受けました。私達はその点幸せなのでしょいか。公害と言われるような事は、あまりありませんが、それでもサンシャイン一帯に行くと、いつもすごい突風が吹いていて、おどろかされます。あれだけの風が年中吹いていたら、近所の人々は、相当風による害をうけている事でしょう。それにあれだけの高いビルですから、地震でもあったらどうなるかと恐れもきつとある事でしょう。私の所でも電波障害があつて、テレビがよくうつらない事があります。それでも池袋駅にも大塚駅にも近く便利なせいか、私の家の近くの空地には、毎日のようにマンションやビルの建設が始められています。そしてそのたびに、ひよつとしてあの空地は公園になるかもしれないな—と言う私達の小さな期待もうらぎられるのです。豊島区は、一人当たりの公園の面積も他の区に比べてせまいような気がします。

あーもっと、もっと緑がほしい。せめて、アパートやマンションを建てる時は、周りに必ず、緑を植えるという条件付きに出来ないものでしょうか。又、区のお金があまったりしたら、ぜひ、木や花を植えて、緑をふやしてほしい。そして、できる限り緑にふれて、健康な体を作り、ひよつとしてこれからくるかもしれない公害にそなえなくてはと思います。そして、私達の町をみせかけだけのゆたかな町でなく、自然と一緒に生きられる、健康的で、心ゆたかな町にみんなできていけたらと思います。

僕の稲づくり

私立武蔵中学校 二年 山中友之

「僕にも五粒！」

「僕にも十粒！」

米どころの田舎へ行ってきた友を囲んで、面白半分にモミをわけてもらったのも、もう四年前。それからずっと庭でイネをつくり、今年で四回目だ。

最初のうちは、夏休みの観察材料にするにも、花がなかなか開かず困ってしまった。

やっと花がさいても、秋になってみれば、どのモミもどのモミも、さわっただけでつぶれてしまった。手ごたえがないのだ。なんとかきちんと実ったモミは、来年蒔く程しか残らなかった。

二年目。前の年のモミを水に入れると、全部ういてしまい、とてもなさけなかったことを思い出す。その年は特にひどく、来年の種モミさえ収穫できなかったのだ。

しかし、僕の稲作は、そこで終わらなかった。

父が水戸へ行ったとき、土産に納豆を買ってかえった。

わらでできたその包みには、十〜十五粒のモミがついていた。

翌年、僕は一生懸命育てた。

育てる「田」も、以前の、庭のすみをコンクリートブロックで囲む方法をやめた。水がしみ出してしまうので、水をはることができず、能率が悪いのだ。

近所の小学校で、バケツに水をはって田にしていたのを見て、古くなったつけもののたるを「田んぼ」にしてみた。

妹や弟も、毎日たるに水を入れる手伝いをしてくれた。

実った！実った！

僕の育てたイネが実った！五円玉に刻まれたイネのように、ころころと太ったモミが沢山ついている。それから少しの間、嬉しい忙しさが続いた。まず、兄弟そろってイネのたばをもって写真をうつし、一たび祖父の写真の前に供えて、次は脱穀だ！

ビールびんの中に入れたり、底でたたいたり、父と二人で大騒動をやったわりには仕事がかどらない。結局、大部分は指で一粒一粒つぶして脱穀した。

極めて原始的な方法でモミがらを取ったあと、母に玄米をたいてもらった。

茶色い米は、みんなのごはんの上に少しずつのせられた。

「かたいっ！」

「かたいっ！」

と、妹や弟は初めての玄米に文句も言ったが、「いいんだよっ。そういうの、健康にいいんだぞっ！」

と、僕は得意で仕方がなかった。

住宅地の真ん中で米をつくることって、こんなにも楽しいことだったろうか……。

今年は、初夏の日でりのとき、クラブ活動に熱中しすぎて何日も水をやり忘れ、気が付いたときは、せっかくのび始めていた苗代のイネが、全部枯れてしまっていた。

プラスチックの箱の苗代の中では、土が無残にひびわれていた。

一目見て、もう世話しても無理だと思った。とてもくやしかったが、そのまま「箱型苗代」はベランダに出しておいた。

数日後、大雨が降った。

しばらく降り続いたな……と思ったら、苗代のイネが、何本か再び成長し始めたのだ。すごい生命力だ。

僕は、うっちゃっていた苗代の世話を、再びはじめた。田植えもした。

それからそのイネは、穂を出し、花をさかせた。今でも庭のつけものだるの中で張切っている。けれども、途中で枯れかけたせいか、とてもたけが低い。はたして実をきちんとつけてくれるか、兄弟で心配している。

最近、農家のイネを見かけるたびに、

「ああよく伸びているなあ。」

と思う。

四年間自分で育ててみたけれど、あまり収穫がなかったので、農家のイネを見ても、以前のように「あたりまえ」と思えなくなってきた。

一体どうしてあんなに伸びるのだろう……。不思議でならない。



やさいの たねを まいてそだて ましょう。
 こんで いる ところや ひかげの ところでは そだちかたが
 おそいのは どうしてでしょうか。

「トマト」 小学二年理科

都市における市民菜園

古い歴史を持つヨーロッパの都市では、昔から市民が小菜園をもっていました。第一次、第二次大戦中は、個人の食糧確保が目的でしたが、戦後は、趣味や緑地として、あるいは家計と健康を守るため、さらに子供の自然教育など、目的も多様化してきました。

特に、西ドイツでは、都市計画（連邦建築法建築詳細計画）の中で、小菜園が公園、スポーツ施設、緑地帯などと同じように都市機能の一つとして計画的に配置されています。

日本でも、市民の間から菜園を持ちたいとの要求が強まっています。すでに各地で、土に親しみ、作物を作る喜びと、収穫の喜びを味わっている方々がたくさんいますが、希望者の割に菜園が少ないため、利用者の競争率が高くなっているのが現状です。

最近、農地が全く無くなった都内の区が、菜園を持ちたいという区民の要請を受けて、農地のある区や農家に協力を求め、区民農園として設置するケースが増えています。（12区22市で実施中・60頁参照）

この野菜作り、実際にやってみると仲々むづかしく、初めて作る品種など失敗しがちです。じょうずな方は難しい肥培管理を、野菜作りではプロの農業者にたずねたりして、立派な野菜を作って食卓にのせています。

秋になると、利用者は菜園で収穫された野菜を持ち寄って、収穫祭を実施したり、専門の農業者を審査員にたのんで優秀な農作物を選ぶような催し物が行なわれ、みんなで収穫を喜び、楽しんでいます。

みじかにある植物園

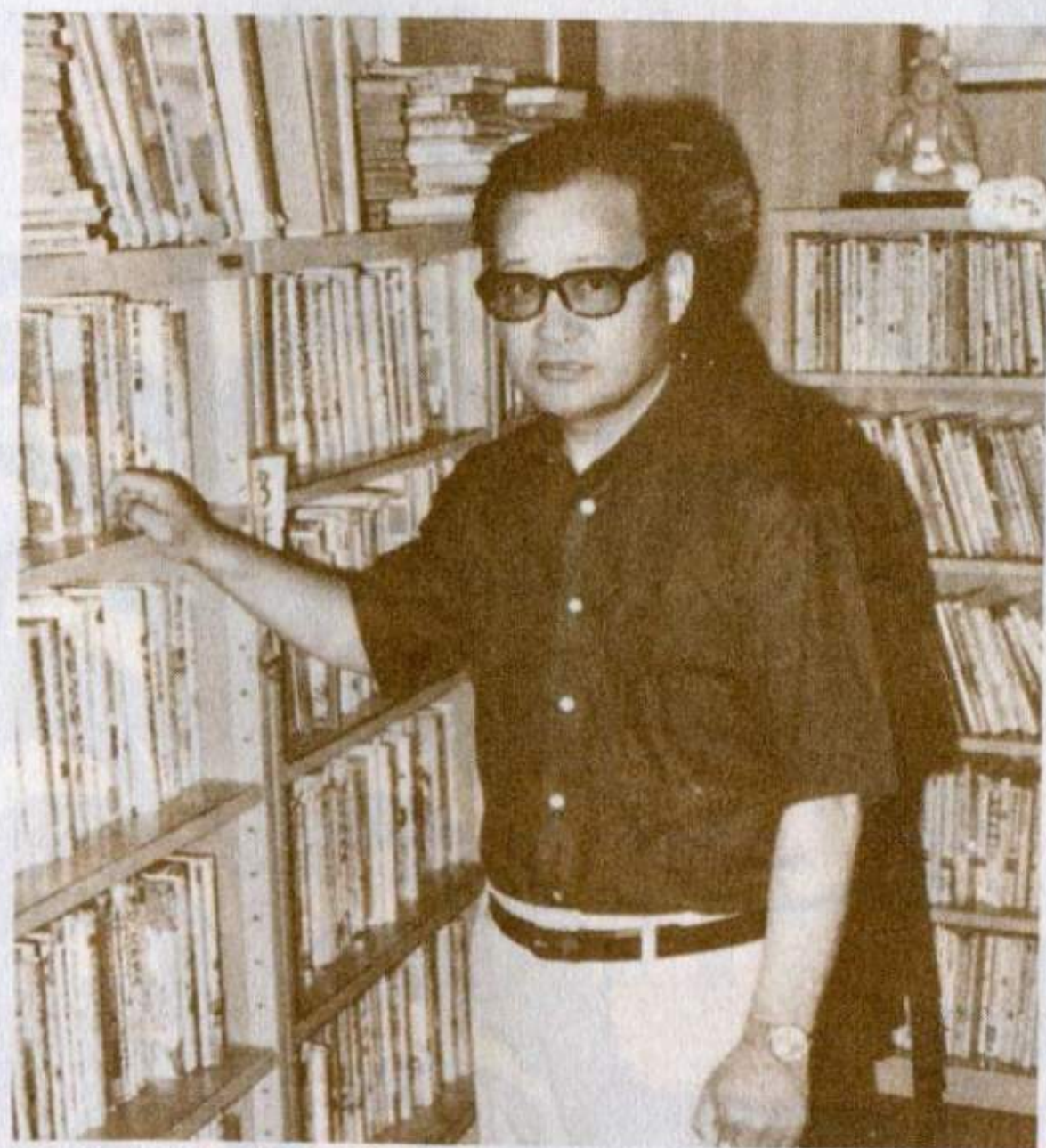
市民菜園は、食卓と結びついたみじかにある植物園です。菜園の利用者達は初めのうち、ナス、トマト、エダマメ、ダイコン、トウモロコシなど、作り易い作物を栽培しますが、何年か作っている方々は新しい品種や変わった作物を作りはじめます。赤むらさきのレッドキャベツ、ハイビスカスに似た黄色い花のオクラ、中国料理に使われるパクチヨイ、かわいい赤カブ、ラディッシュ、キャベツの変種コブカンランやメキャベツ。それ以外にも外国産の野菜などたくさん栽培され、一区画ごとに区切られた畑ですくすくと育っています。

この野菜は、何の種類で何という名前か、どのようにして食べたらいいかなど、子供に教えながら菜園をみてまわるのも楽しいものです。



農地と教育

長崎源之助



長崎源之助（児童文学作家）

本のある遊び場「豆の木文庫」を創立。文庫では、いつも元気のいい子どもの声がたえません。また毎年9月実施の「ごはん・お米とわたし」作文・図画募集（全国農協中央会主催）の作文の部審査委員でもおなじみ。

ある出版社の社長にきいた話です。

「私は百姓の子なので、土をいじっているとなんとなく心が安らぐんですね。ですから、社のベランダにプランターをおいて、トマトの苗をうえ、毎日水をやっていたんです。

あるとき、やっと小さな実がなったんです。それを見て、社の女の子が、あら、トマトって、赤い実ばかりだと思ってたら、青いのもあるんですねっていうんです。私は、あきれてしまいました。青いのが赤くなるんだといってやりましたが、なんとその子、秋田の農家の子なんですから、おどろきますよ」まったく嘘のような笑い話です。

今では農家も後継ぎがなく田畑を売って規模をちぢめる人がふえています。自分の住まいの周囲は町に化し、田んぼへ行くにも自家用車や耕運機で出勤といったぐあいです。だから、農家の子どもでも、自分の家の田んぼも畑もろくに見ないで育ってしまう者もいるのです。

受験体制の中では、子どもたちは野良仕事の手伝いどころではありません。親のほうも、少しばかり手伝ってもらうより、しっかり勉強していい学校へ入ってほしいと願っているみたいです。

農村の子でさえそんな状況ですから、まして都市の子どもたちが、農産について知らないのはあたりまえです。しかし、そんなことでいいのでしょうかね。

私は、全国農業協同組合中央会が募集している「ごはん・お米とわたし」の作文の選をしています、

農村部の子どもたちの作文には、父母が稲づくりに精出している姿を見てすばらしい感想文を書いています。

台風の中へ稲を心配してかけて行く父母たち、暗いローソクの灯を見つめて、肩をよせあつて、父母や稲の無事を祈って待っている兄弟、あるいは収穫時の忙しさ、冷害の稲を手に暗い顔している祖父など、そういう生活を肌で感じながら、米の大切さを知り、働くことの喜びや、生きることの厳しさを理解しています。



都市の子どもの作文には、そうした厳しさこそありませんが、学校農園で稲を育てたり、友だちの家の田んぼに手伝いに行ったりした経験を活写したものによく出会います。

ここに掲載されている山中友之君の「僕の稲づくり」を読んで下さい。納豆のわらづとからとったモミを古いつけもの樽の「田んぼ」に蒔いて、へ五円玉に刻まれたイネのように見事に育てあげた感動が、具体的によく書かれています。このささやかな農作業の中で、彼は観察力を養い、稲の生命力を知るなど、実に大きなものを得ているはずです。

学校農園の稲係りの子が、稲づくりのことをお米屋さんの袋に書いてあった住所を見て問い合せたところ、まもなく返事がきたという作文がありました。

「おじさんはいそがしいのに、米づくりの順や方法、大事なこと、楽しいことなど色々書いて下さった。田植えは一度に村中総出でやらなければならないこと、害虫をふせぐこと、雑草をとることなどがとても大変だという。ふだんはなんとなくたべているお米が、こんなに苦労して作られていることが初めてわかった。」

そして、その子は、学校の田んぼの稲刈りは、稲係りだけでなく、全員でやってみたい。とれたお米で、おにぎりを作ってみんなでたべたい。一、二年生の子が「おいしいなあ」といったべてくれる日が待ちどおしいと書いています。

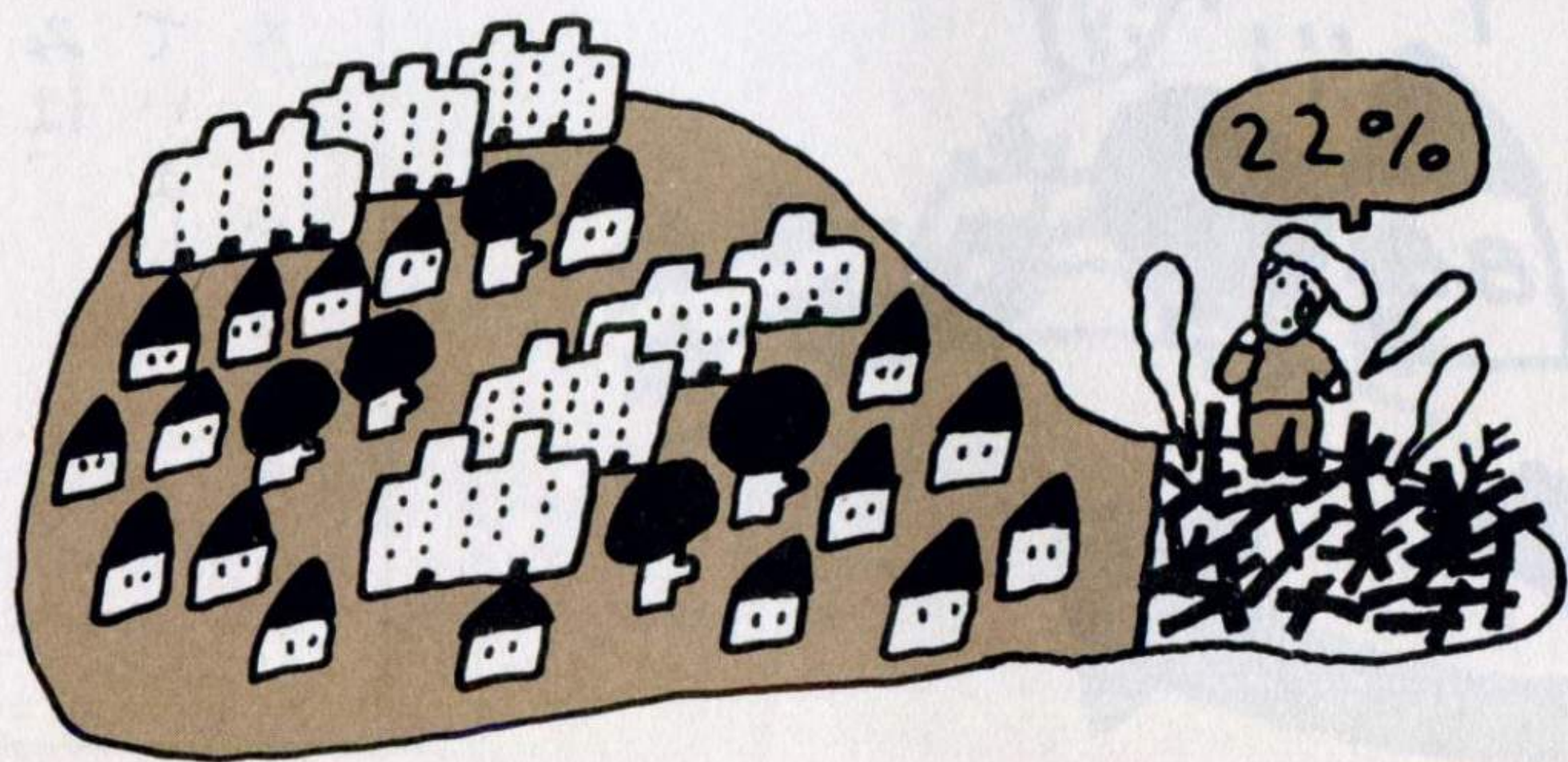
「もし東京に大地震がおこったら」

いま世界のあちこちで大地震が発生しています。そして日本でも東海地震などの危険性がさかんに論じられています。

都防災会議地震部会（56年3月）の調査研究によると、三多摩地区では人口の急増や火勢を食い止める農地（オープンスペース）が激減するなど悪条件が増えているため、関東大震災と同じ規模の地震に見舞われると、23区はいうにおよばず多摩地区の市街地でも22.2%（6,874ヘクタール）が焼け野原になると指摘しています。

主な市町別市街地焼失率

羽村	25.6%	国分寺	34.6%
福生	33.8%	国立	50.8%
立川	42.4%	田無	48.1%
武蔵野	29.4%	保谷	37.0%
昭島	25.3%	東大和	36.6%
小平	47.9%	町田	24.7%



（ながさきげんのすけ）

先日訪ねた団地のはずれの幼稚園にも、菜園がありました。年長組の子が、スコップで畑をほりおこなっていました。小さいときから土に親しませ、勤労のたのしさを味わせてやりたいんですと、園長さんはいつてました。大根の種をまき、みんなでポリバケツや牛乳の缶で水をかけました。やがて、芽が出ました。

子どもたちは、「ロケットみたいに大きな大根ができるといいね」などといっていました。葉がどんどんのび、茂っていききました。ところが葉っぱに無数の穴があいてしまいました。「虫がたべちゃったんだ」

おでんにしようといっていた大事な大根です。虫なんかにやられてなるもんか。子どもたちは虫をさがしました。いろいろ葉っぱの裏に青虫が何匹もみつかりました。その虫を箱に入れて飼いました。毎日見ていましたが、ある日突然その虫がいなくなっていました。でも、子どもたちは、そこにモンシロチョウを発見したのです。子どもたちは、感動のあまり思わず声をあげました。

子どもたちは、稲や野菜をつくることで、いろいろの観察をし、自然の神秘さを知ったのです。

都市の中に農地は不用という人もいますが、これらささやかな実践からも、田んぼや畑が身近にあつたら、子どもたちの成育にどんなに役立つかがわかります。そして、何よりも都市にこそ、緑の自然を何時までも残しておきたいものです。

二十年ぐらい前まで、わたしたちの家から出るごみは、庭にあなをほってうめたり、庭でもやしたりされていました。

「家からだされた、ごみのゆくえ」

小学四年社会

自然の循環 「土」

自然の恵みを受けて育った食物を動物は食べ、排泄物を土に返し、再び肥沃な土壌から豊かな実りを得る——この自然界のサイクルを利用して人類は作物を栽培してきました。

江戸時代、近在の農家の人達は、自給自足では足りない肥料を江戸に求めました。馬や牛で野菜や穀物を運んだ帰り、武家屋敷や町屋敷の下掃除を引き受け、肥桶に入れて持ち返っていました。

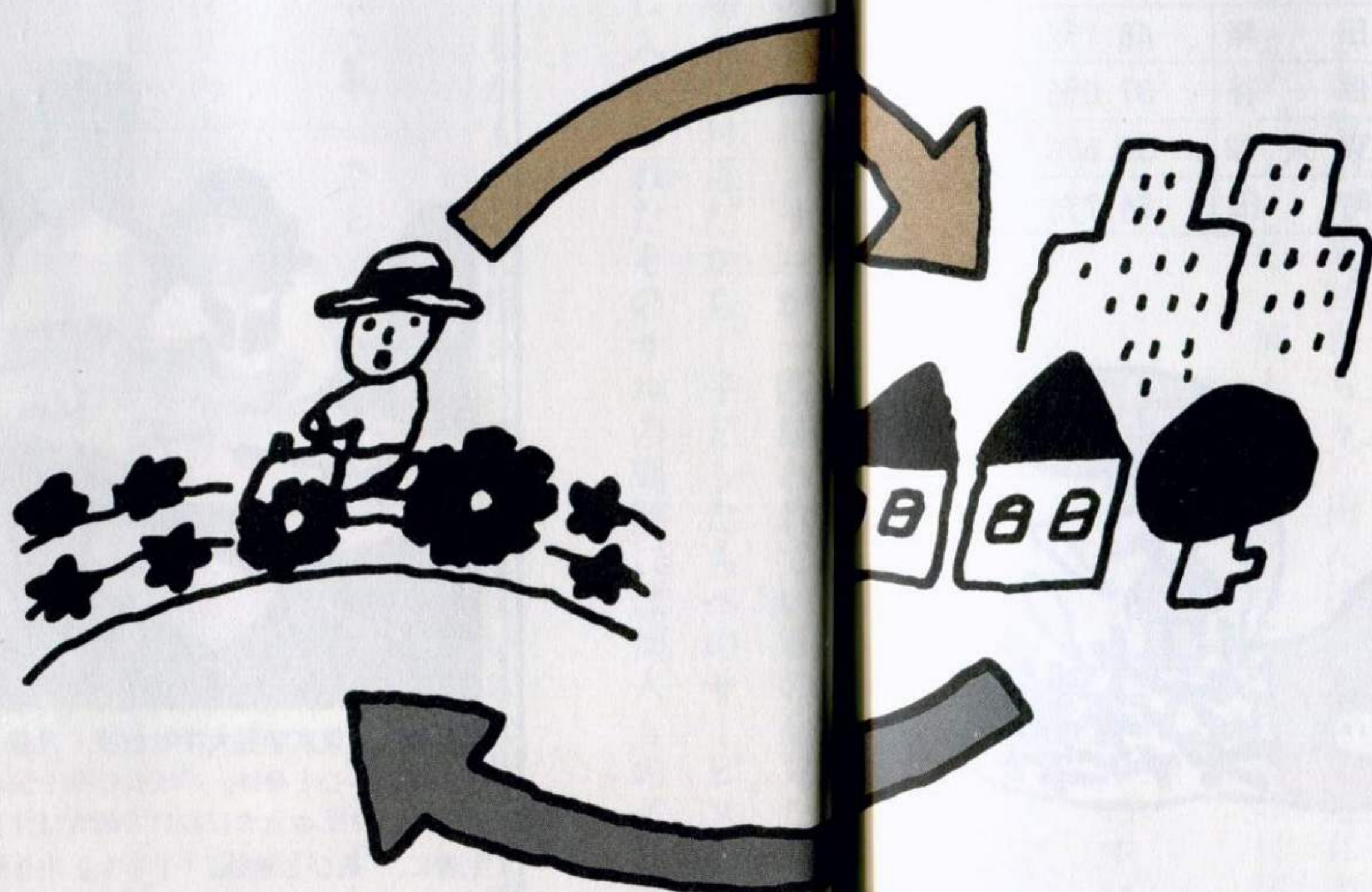
このように、都市住民の下肥を畑に還元する資源の再利用は、23区内においては昭和46年ごろまで（東京都統計年鑑）続けられていました。しかし、衛生上の問題から污水处理場や水洗便所が普及し今までのサイクルがとぎれ、土に戻す機会がなくなってしまう、一時は化学肥料の時代になってしまったこともありました。

都市から排出される多量のゴミや下水は、焼却処理や埋め立て、更に海洋投棄などで処理され、多くの公害を生んできました。しかし、最近この不自然なサイクルを元にもどそうと、都市からでた廃棄物を再利用した堆肥作りが行なわれています。

下水汚泥からの堆肥を汚泥コンポスト、都市ゴミの堆肥を都市ゴミコンポストと呼んでいます。下水汚泥から堆肥を作る場合、注意しなければならないのは、水銀やカドミウム等で汚染された工場排水が下水に入り込んでこないかということです。これは、再び作物を通して人々の口に入る危険も十分ありえるからです。

その点東京では、全く心配のない多摩ニュータウンの生活排水だけから良質のコンポストを作っています。また、夢の島にある清掃工場では、分別収集された台所のゴミから堆肥を作っています。しかし、まだまだ不用意に投げ込まれた乾電池などがまぎれ込んでいたりして、磁石等を使って分離していますが、今後は、都市住民がこの分別（危険物と生ゴミ）に理解をもつて、協力してくれることが重要なポイントです。

これにより、都市からでたゴミが、農地に返り、そこから豊かな実りが得られるという、好ましいサイクルが再び動きはじめるのです。



自然がもたらす 豊かな子どももの心

サル



深谷和子（東京学芸大学助教授・児童心理学者）
子供達の「心と身体」の成長に関し悩みを聞いてあげる
手法などクリニックにおける研究は注目されている。
主著に、「遊びと勉強」「子どもと生きがい」などがあります。

かなり前のことだが、東京のある大きなデパートの屋上に、サルが一匹飼われているのを見た。
ちいさなベンチやアイスクリーム屋やヤキソバの屋台の付近だから、子どもたちへのサービスのつもりだったのかも知れない。事実、ちいさいオリの中に入れられたそのサルの周囲には何人もの子どもたちが群がっていた。

近よってみるとそのサルはまだちいさな子ザルで、しかも一心に指しゃぶりをしているのだ。子ザルの指はまっ赤にはれ上っている。

人間の子どもたちが、指にタコを作りながら、チュウチュウと音をたてて指しゃぶりをする様子とそっくりで、私はびっくりした。

ちょうどその頃私はちいさい子どもたちの指しゃぶりの研究をしていた。

人間の子どもの場合、①人工栄養で、②母親があまりかまってやらなくて、③自然の中での遊びが不足している（すなわち緊張解消の機会がない）という三つの条件を持っている場合が多かった。

この子ザルの場合も、まさにそうだったのだろう。ほとんど身うごきのできないちいさなオリの中に一日中とじこめられ、絶えず周囲の子どもたちの視線にさらされる生活は、ストレスそのものだったのだろう。その解消を、子ザルは指しゃぶりに求めたのだと思われる。

このエピソードは、人間の子どもたちにもそっくりそのまま、あてはめることができるかもしれない。

私たちが見逃しがちなことの一つに、人間と自然との関係がある。

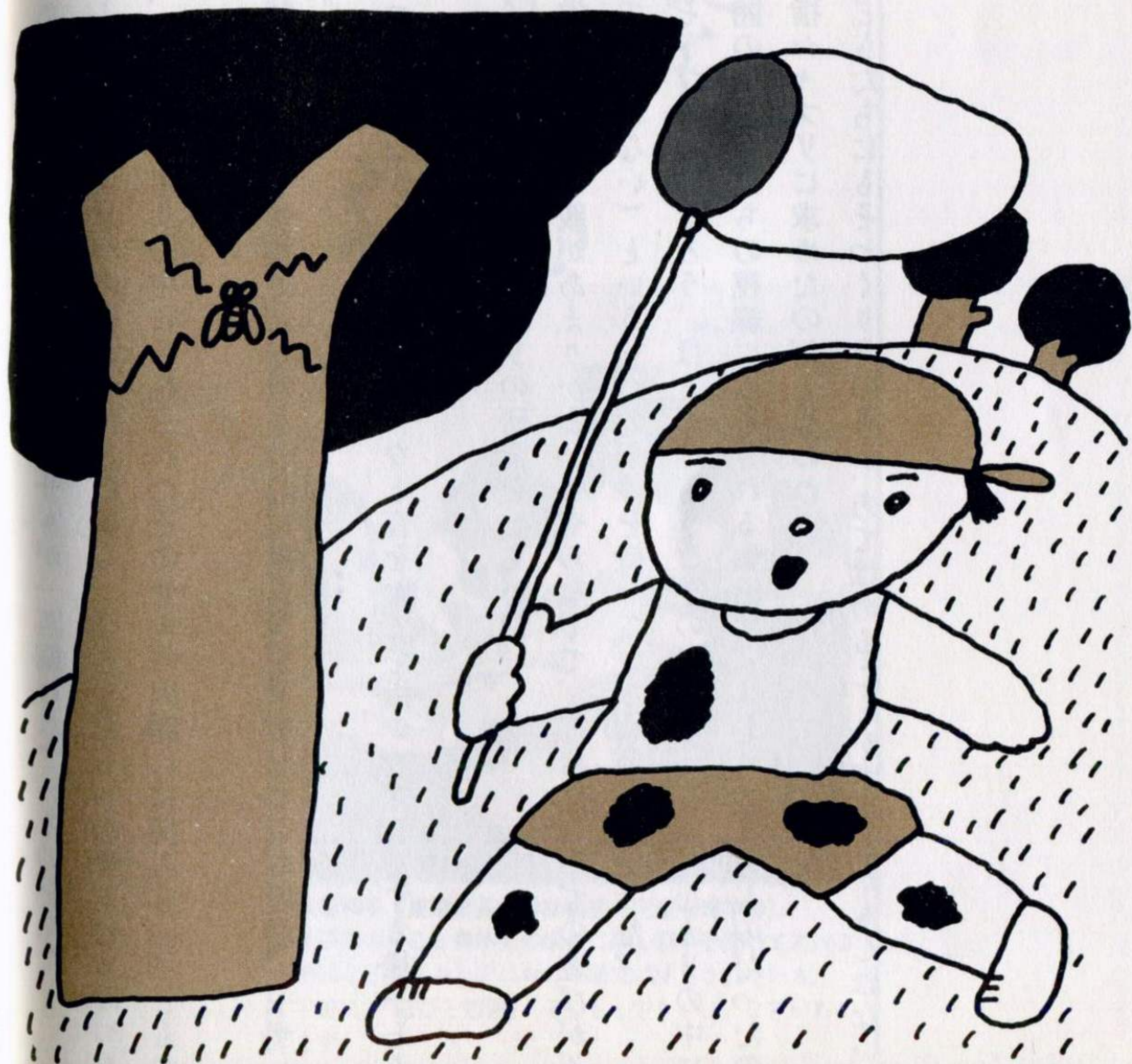
私たちはこれまでともすると、人間と自然とを分けて考えることに慣れて来ている。ところがよく考えてみると、人間はもともと自然の一部なのだ。自然という母親から、形の上では切り離されて、それぞれが独立して存在しているかに思えるだけで、ちいさい子どもや老人や、またストレスの多い状況に置かれて心がひずみかけているおとなたちの場合、どうしても母親のふところに戻る必要がでてくる。とくに大都市という住環境は、考えてみるとよほどタフな神経の持ち主でなければ住めないはずの環境なのであろう。

本来なら、年齢は何歳から何歳まで（つまり青壮年段階）で、しかも一定のテストで合格した者だけ、つまりライセンスの所有者だけが、大都市に住むことを選択できるようにした方がいいのかもしれない。しかし現実には、あらゆる年齢や気質や職業の人びとが都市に集まって来て、鉄とコンクリート造りの建物の中で暮している。

乳幼児は指しゃぶりを始め種々の神経性習癖とよばれる問題行動をひき起し、小学生は登校拒否、中学生は家庭内暴力や校内暴力をひき起す。そしておとなは——考えてみると、大都市に住む私たちは、大なり小なりどこかに病める心の部分を持って、暮しているのかもしれない。

とくにちいさい子どもたちは、毎日の生活が、自然の中で行われることが必要なのだ。昔の子どもたちがそうしたように、泥んこをし、雨上がりの水たまりの中に入り、草むらで虫をつかまえる。木に登り、ハダシで土や水の中に入る。作物が芽を出し、ふた葉を出し、一日一日と成長して行く様子を見たり、セミの幼虫がカラからぬけ出して、一人前のセミになる様子を目のあたりにする。

こうした環境が、できるだけ子どもの住んでいる環境（生活圏）の中に、または隣接してあることが



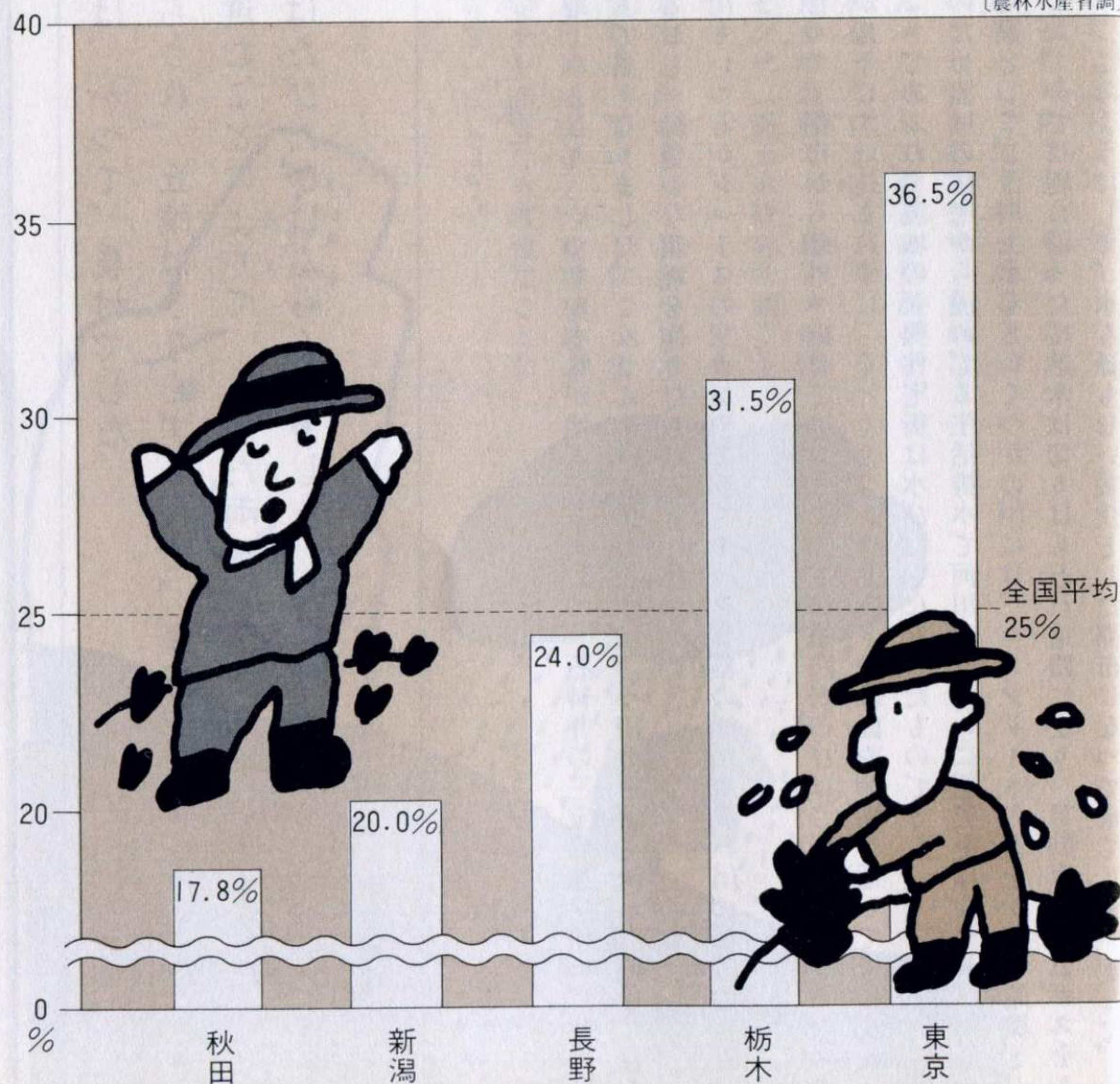
「東京農業の力強さ」

都市農業の力強さを端的に示しているものに農業従事日数があります。

これによると東京では年間150日以上も農業に従事している農業者が36.5%もいるのです。

秋田、新潟などの農業県と比べてこんなに高率なのは、狭い農地を有効に利用して、新鮮な野菜を都民にたくさん食べてもらおうと、努力しているからで、コマツナ、ツマミナなどは年に6回も収穫する方法をとっています。

〔農林水産省調〕



必要だ。おとなにエスコートされてごくたまにそれを見に行く、といったことではなくて、子どもが毎日でも、自分の足で（つまり自分の意志で）歩いて行ける範囲に自然があることが、いちばん望ましいことになる。

自然と無理に分けられた子どもが、一日のうちたとえ数時間でも、自然とふたたび一体化して、自分をとり戻す。

これがちいさい子どもたちにはぜひ必要だ。

そう考えて行くと、都市農業の意味が、人間の精神衛生や子育ての観点から、もう一度評価されなければならぬだろう。はた目には、そこにビルや道路や駐車場を作れば、すぐにもぼう大な利益を生み、かつわれわれの生活も便利な環境を作り出すのに、なぜ大都市の片隅で、土を耕し、種をまき、肥料をやって、野菜や花や穀物を作ってなければならないのか、と不思議に思われるのではないだろうか。

しかし都市は、ほっておけば一層の経済性と生活の便利さを求めて、その人工性、反自然性をエスカレートさせて行く。

都市における鬼っ子のようなもの、またはある意味では「盲腸」（あっても役に立たないもの）のように見なされがちな「農地」が、われわれの心に、とくに幼い子どもたちや、体も心も弱くもろくなった老人たちに、どんなに大切な役割を果しているか。それを忘れてはならないだろう。

（ふかや かずこ）

郊外の住宅地は、かつて、農村でした。水田や畑はならされ、丘陵はきりくずされて、住宅地となってきたが、宅地化が進むことによって、ふった雨が、小さな川に集まるため、小さな川はたびたびはんらんしました。

「人口急増の郊外」 中学地理

もう一つの自然の循環 「水」

武蔵野に降りそそぐ雨が地下水となり、いつしか水脈が地表に露出して、石神井の三宝寺池を始め、井の頭池、善福寺池など、あちこちで泉となりました。こんこんと湧き出した水は、小川となって流れ、流域に住む人々の生活用水や田畑をうるおし、緑豊かな環境を作りだしてきました。

しかし、小魚の群れる小川もいつしかジュースの空カンやプラスチック容器の浮かぶ臭い川になってしまったのはなぜでしょう。

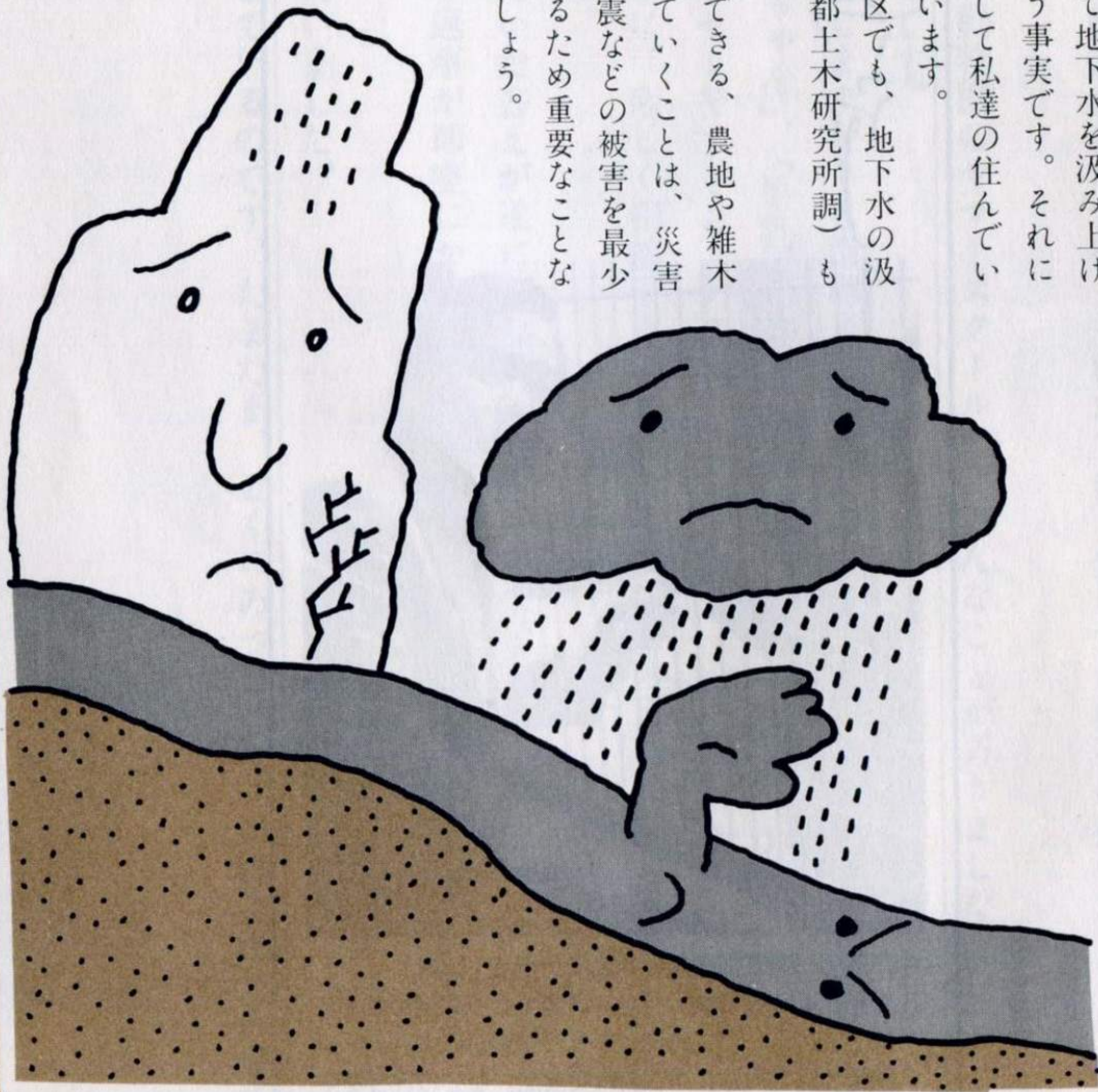
都市に人口が集中するに伴って、都市から郊外へ向けてコンクリートの道路がのびはじめ土が少なくなってきました。これによって雨が地下にすい込まれずに、そっくりコンクリートの表面や側溝を通して川に流れ込むようになると、川はあちこちであふれて流域の新興住宅街は水びたしになったものでした。

また、不完全な下水処理のため流域の住宅から流れ出る生活排水で河川はしだいに悪臭をはなつドブ川となってしまうのです。この対策として、千川上水などいくつかの川には、コンクリートの蓋をかぶせ暗渠として地上から葬ってしまいました。今では堤に沿った桜並木は切りはらわれ道路に変わり、自動車が排気ガスをふりまいて走りまわっています。このようにして、水も緑もない殺伐とした都市になって来てしまいました。

大地をコンクリートで覆ったことにより、発生したもう一つの問題点は、地下水の補給が断たれてしまった大地から工業用水やビルの冷房用として地下水を汲み上げるため、地盤沈下が起っているという事実です。それによりビルが傾いたりひびが入ったりして私達の住んでいる都市の地盤は危険な状態になっています。

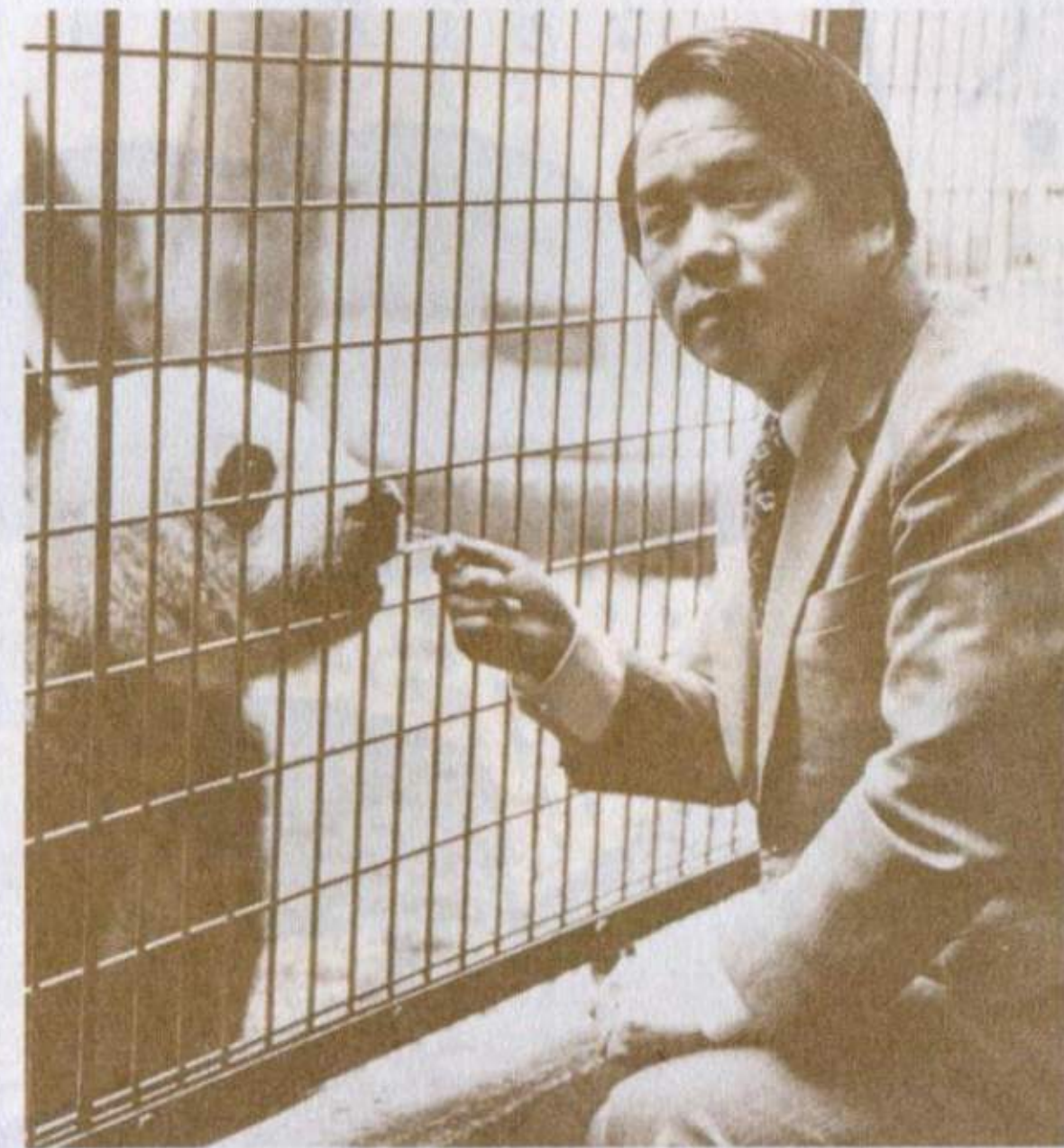
最近では、人口の増加した多摩地区でも、地下水の汲み上げにより、6年間で52センチ（都土木研究所調）も沈んでいる地域もあります。

雨水を地下にしみ込ませることのできる、農地や雑木林など緑のオープンスペースを守っていくことは、災害時の避難場所を守ることと共に、地震などの被害を最少限にとどめて、都市住民の安全を守るため重要なことなのだと言う事も忘れてはならないでしょう。



都市農業と 子どもたち

中川志郎



中川志郎（東京都多摩動物園飼育課長・獣医）
上野動物園時代には、パンダ課長として全国の子どもに親しまれました。動物たちとの30年間のふれあいが「動物子育て物語」や「動物交友記」などの著書を生みしました。

動物園では、毎年、夏休みの子供たちを対象に、サマースクールを開校しています。自然から各々隔絶され、生き物と縁遠くなっている子供たちに、少しでも身近に接してもらいたいというのが主旨です。

数年前のことになりますが、上野動物園のサマースクールで、こんなことがありました。連想ゲームで遊んでいた時のことです。

「ミルク」という言葉から何を連想しますか？と指導員が聞いたのです。子供たちが一斉に手を上げました。そして口々に答えます。「赤ちゃん」、「牛乳ビン」、「牛乳配達のおばさん」、「冷蔵庫」、「ミルク工場」、「アイスクリーム」、「ミルクセーキ」……などなど。

はじめは、元気な子供たちの答えに、楽しく相槌をうっていた私は、そのうちに、どうしようもなく淋しい気持ちになってしまいました。

私が真先に出るだろう、と思っていた答えが遂にでなかったからです。

当然のこととして「乳牛」、という返事が即座にかえってくるものと私は思い込んでいたのです。

「かんじんなこと忘れているよ……」

私は、思わず腰を上げて、そう言いました。

でも、子供たちは、キョトンとしているのです。たまたま、近くにあったミルクの罐をとりあげて、

私は、そこに画かれている雌牛を指さしていました。

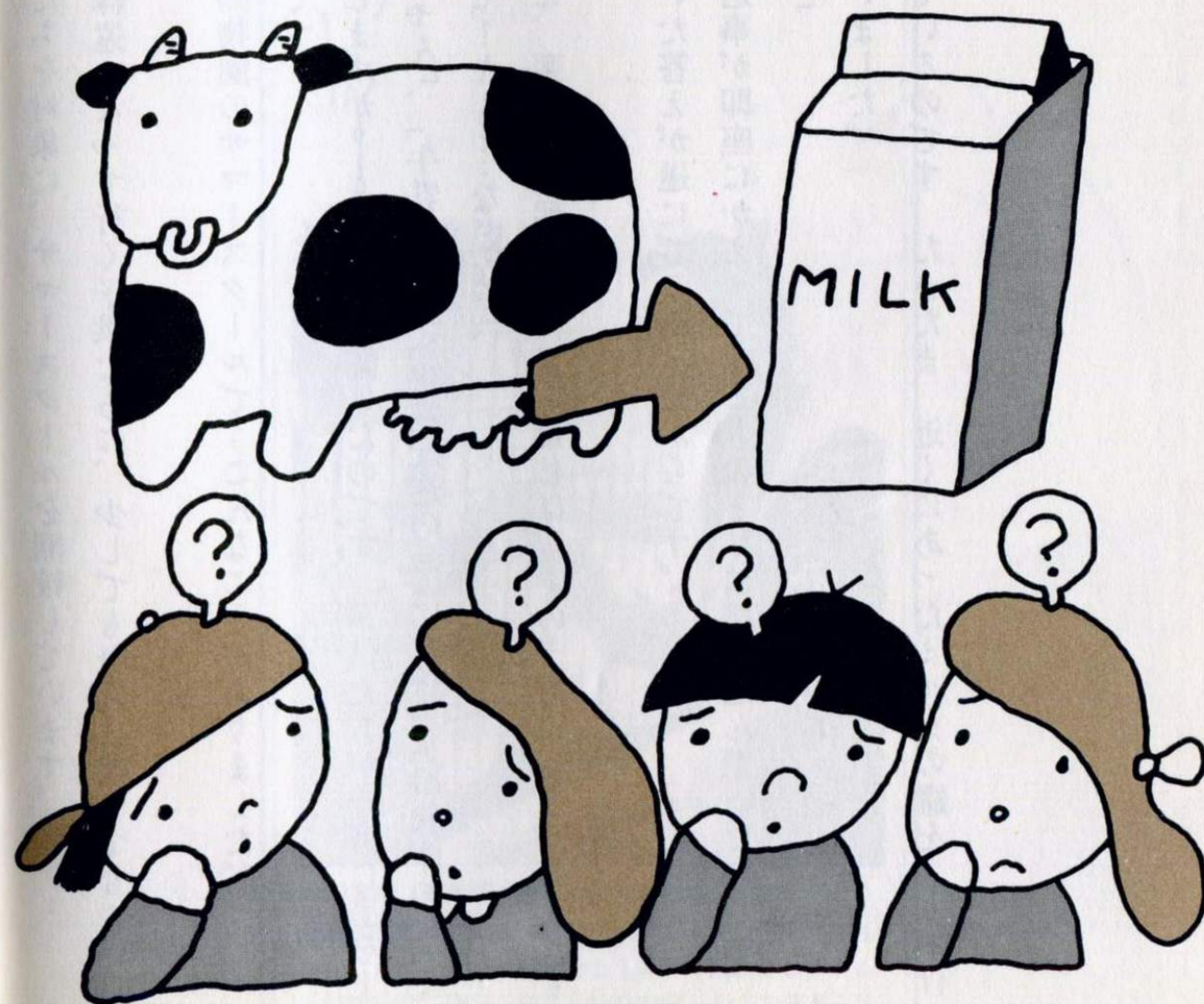
「なぜ、ここにこれが画いてあるの？」

そして、やっと、ひとりの女の子が、遠慮がちにこう言ったのです。

「そうだ、ミルクって、牛の乳からできるのよ……」。

でも、何人かの子供たちは、まだ不思議そうな顔をしているのでした。

事柄は、これだけのことなのですが、少なくとも私にとっては、とてもショックでした。



「遂にここまで来てしまったのか」と、大げさでなくそう思われたのです。考えて見れば、大学生になっても、あたり前のような顔をして四本足のニワトリを画くということですし、ある中学生は、死んだカブトムシをデパートの玩具売り場に持参し、真顔で「電池を交換してよ」といったということですから、これ位のことは驚く方がおかしいのかも知れません。でも、これらのことは、決して笑ってすましてはいけけないのではないかと私は思います。

こんなことがあって、その後、上野動物園のサマースクールには、実物の乳牛をつれて来て、乳しぼりをさせる行事がとり入れられました。子供たちは、まず、牛の体の大きさにびっくりしてしまいます。そして圧巻は、子供たちが実際に乳をしぼった時です。

指導員に教えられるままに、子供たちの手にあまるような乳首をおさえ、ぎゅっとしぼりますと、勢いよく乳が、白い線のようになるとび出して来ます。そして、第一声が、

「わっ、あったかい」です。牛乳は、冷蔵庫にあるもの、冷たいもの、と思い込んでいた子供たちにとって、あたたかい乳は、まるで予想外だったのです。最後にしぼった乳を口々に味見して見ます。

「この牛乳甘いよ！」と子供たちはいいいます。

しぼり立てのあのまろやかな味は、きっと甘く感じられたのにちがいありません。

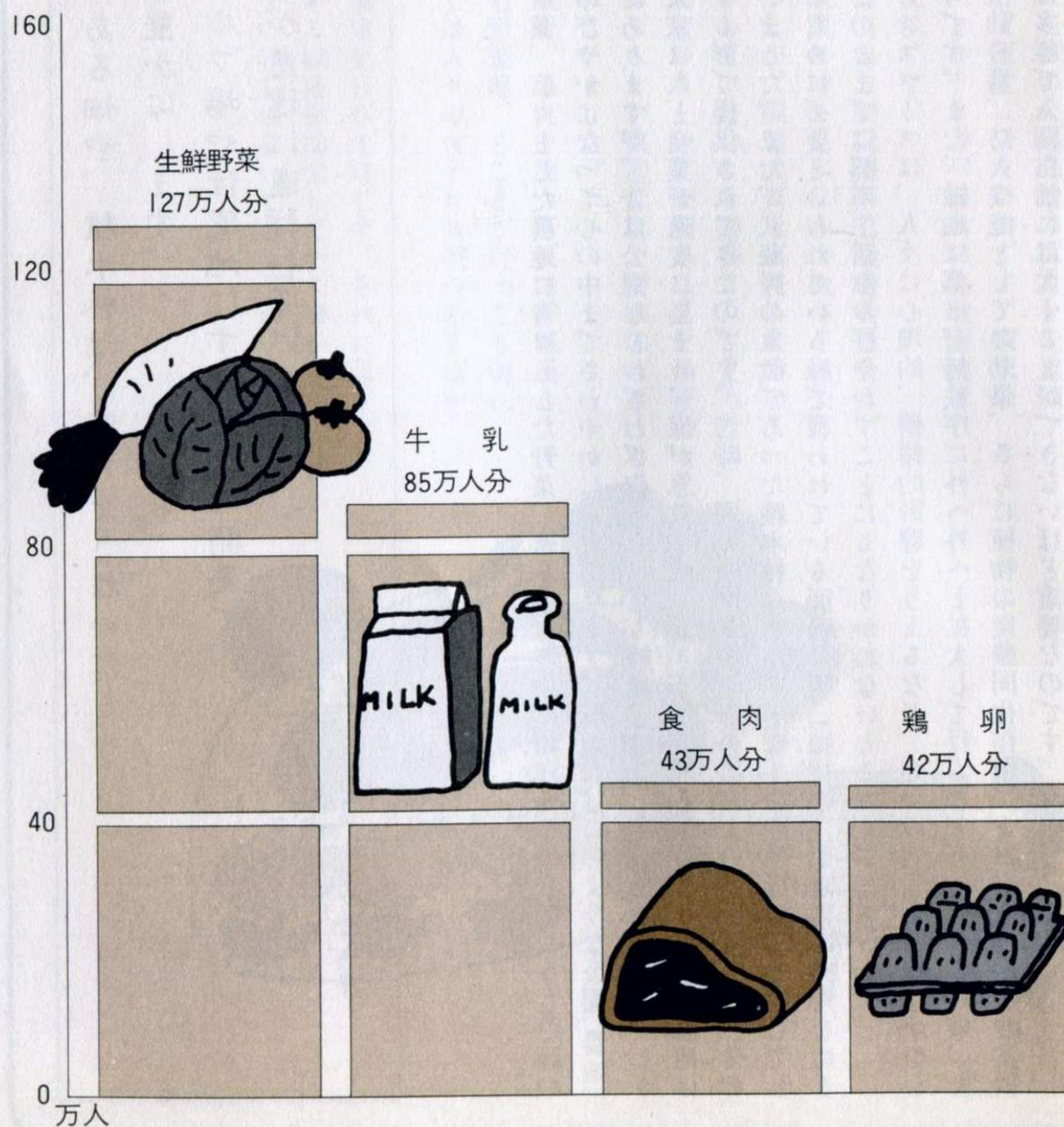
おそらく、子供たちは、この経験を忘れることはないでしょう。そして、牛という動物を、本当に身

「東京の畜産」

東京の畜産もまだまだ健在です。

乳用牛8,854頭、豚54,340頭、肉用牛2,805頭、採卵鶏425,520羽、ブロイラー340,800羽で、特に物価の優等性といわれている卵は、新鮮さが都民に喜ばれています。

23区にも、牛328頭、豚8,393頭、鶏49,016羽も飼われています。



近に感じ、ミルクを飲む時、そのことを思い出すにちがいありません。

考えて見れば、あたり前のことが、今の子供たちにとって、いかに遠くに行ってしまったのか、空おそろしいようにさえ感じます。

確かに世の中は、便利になり、能率的になり、豊かになっています。でも、その反面、生き物としての人間にとって、とても大切なことが置いてけぼりになってしまっているのではないのでしょうか。

どんなに文明が発達し、文化が進んでも、人間はやはり生き物であり、動物の一つの種類であることにかわりはありません。「母なる大地」という言葉がありますように、すべての生き物は、土を離れて生きることはできないのです。人間が生きるために飲み、食べ、味わうもののすべてが、土と水と光の中でのみ存続し得るものなのです。このことを知らずに育つ子供は、不幸だ、と私は思います。それは、自然の恵み、やさしさを知らずに育つことだからです。

教育は決して学校に於いてのみ完成するものではありません。その子が育つ環境こそ、最大の教師であるはずで、豊かな土と緑を身近に持つことは、その意味でとても重要なことです。都会だからこそそれがより多く必要なのです。都会における農業は、単に生産を上げるためのみに重要であるのではなく、もうひとつ、前述して来ましたような意味でも、大きな役割を担うことができるのではないかと、私は思っています。

(なかがわしろう)

都市の中にある畑や、雑木林は、空気をきれいにし、人々の心を豊かにします。しかし、ゴルフ場や住宅地にするための開発で、自然の破壊が急速に進行しています。

「緑の減少」

中学地理

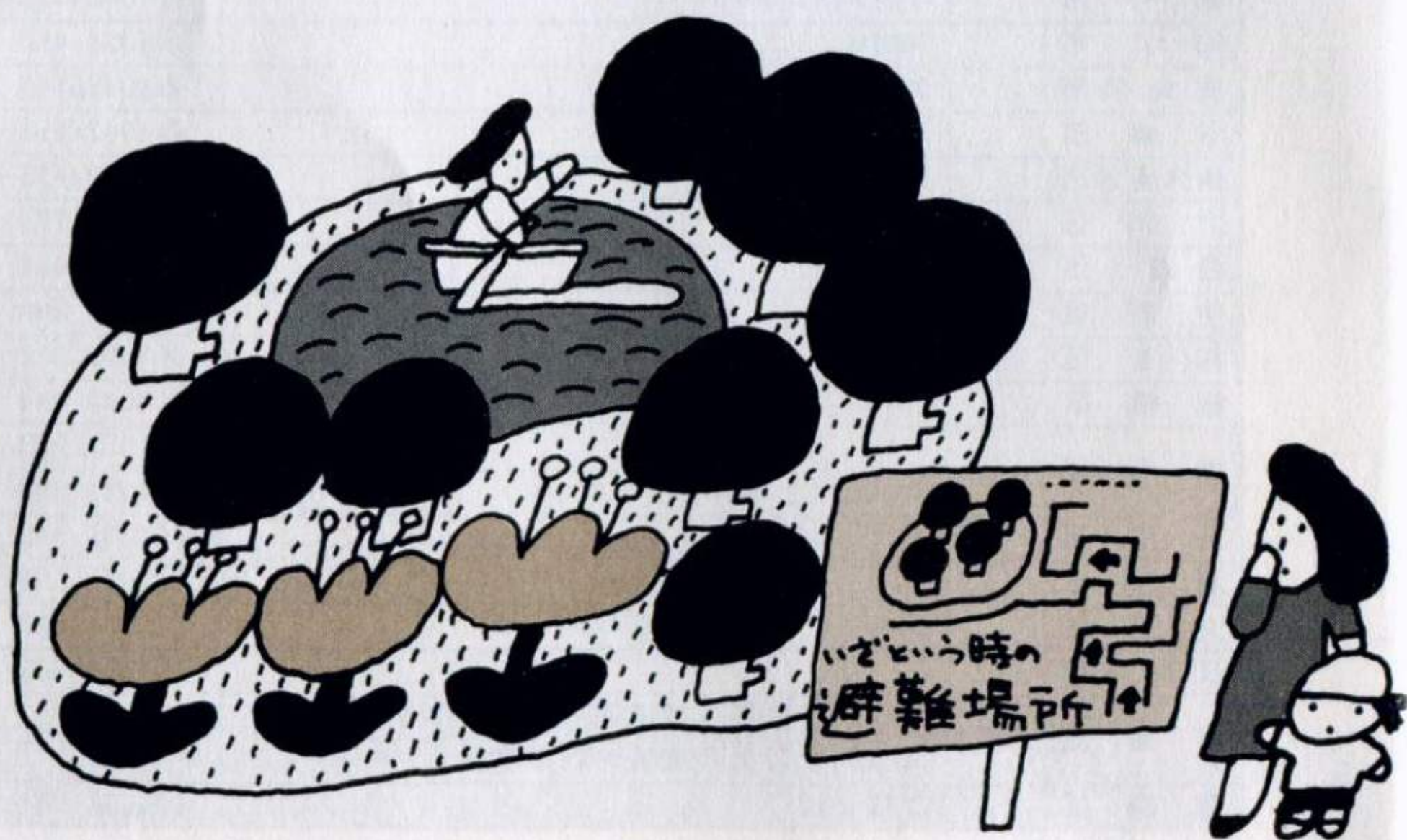
かけがえのない緑

澄んだ青空に緑薫る若葉、広々とした農地に青々とした野菜、遠く木立の中に鎮守さまの社、こうした緑の中にいると体が自然とのびやかになって心の中までさわやかになってきます。緑地にはこのような公園、農地、山林、寺社境内地などがありますが、昔は公園などわざわざ作らなくても緑地帯はいっぱいありました。しかし、昭和三十年代から東京は人と産業が過度に集まり、緑が急激に減ってきました。それにより東京の農地は都民の住宅需要に協力する形で提供されてきたのです。当時、四万ヘクタールもあったものが、今では三分の一の面積になってしまいました。また、武蔵野の象徴であった雑木林もブルドーザーの爪がほじくり返してしまい、快適な生活を送るために必要といわれている緑で覆われている面積の率（緑被率）が限界の30%を切るという地域が増えて、このままでは都市生活をおびやかすことにもなりかねないところまできています。なぜなら、緑のオープンスペースは、人々に心理的、情緒的影響を与えるなど、心身の健康と密接なかわりあいを持っているからです。また、緑地は都市が無秩序に外へ外へと拡大して行くことを防止する効果、災害時の避難場所や救助活動の場、防火機能としての効果、さらに植物の炭酸同化作用による大気中への酸素供給効果など、その役割は多様で人間生活には欠くことができないほど重要なのです。

今、東京における一人当りの公園緑地の広さを先進諸国の中で比べてみますと、極度に少ないのです。東京の農地を全部加えて、やっとヨーロッパなみの緑地面積になるといえない現状です。

数年前、OECD（経済協力開発機構）環境委員会は、日本のこのような環境政策に対して「日本は数多くの公害防除の戦勝を勝ちとったが、環境の質を高めるための戦争ではまだ勝利をおさめていない」と指摘しています。これまでの日本は物質的豊かさとか、便利さなどを最優先に追い求めてきたため、人々が快適に過ごす事のできる環境がおざなりにされていきました。自動車や建設工事の騒音、悪臭を放つドブ川、風通しも日当たりも良くない住宅密集地、どこまで行っても切れ目のない住宅群、これでは人々のストレスがつのるばかりです。

今こそ、快適な居住環境を目ざす時です。それには、みんなで力を合せ現在ある緑地を保全していく事から、まず始めなければならないのではないのでしょうか。



子供たちに残したい身近な自然

発行 東京都農業協同組合中央会

〒151 渋谷区代々木2丁目10番12号

TEL 370-8341 (代表)

昭和56年8月1日発行

本書についてのご意見、ご感想、お問い合わせは下記までお寄せください。

市民農園ガイド

区市町村名	利 用 料		お問い合わせ
	無料	有 料	
青 梅 市		1,000円	市(0428)22-1111
福 生 市		2年 1,500円	市(0425)51-1511
日 の 出 町		100円	町(0425)97-0511
八 王 子 市	○		市(0426)26-1131
町 田 市		1カ所3,000~4,000円	農(0427)35-1511
多 摩 市	○		市(0423)75-8111
稲 城 市	○		市(0423)78-2111
立 川 市	○		市(0425)23-2111
武 蔵 野 市		年3,000円	市(0422)51-5131
三 鷹 市	○		市(0422)45-1151
		2カ所年間5,000円	農(0422)46-2148
府 中 市	○		市(0423)61-4111
昭 島 市		月300円、330円	農(0425)41-0021
調 布 市		280カ所、2,000円	市(0424)88-5111
小 金 井 市	○		市(0423)83-1111
小 平 市		管理料として100円/月	市(0423)41-1211
東 村 山 市		月300円	市(0423)93-5111
国 分 寺 市	○		市(0423)25-0111
		1カ所年間6,000円	農(0423)24-2111
国 立 市	○	330カ所5,500円	市(0425)76-2111
保 谷 市		4カ所9,000円	農(0424)21-3373
狛 江 市		500円/3.3㎡	市(03) 480-1181
東 大 和 市		500円/月	市(0425)63-2111
清 瀬 市		3,000~5,000円/年	農(0424)91-3511
東久留米市		平均9,000円	農(0424)75-0027
大 田 区	○		区(03) 775-5111
世 田 谷 区	○	2,000円	区(03) 412-1111
中 野 区	○		区(03) 389-1111
杉 並 区	○		区(03) 312-2111
板 橋 区	○		区(03) 964-1111
練 馬 区	○		区(03) 995-1111
		6,000円2年目より5,000円	農(03) 999-1451
足 立 区	○		区(03) 882-1111
葛 飾 区	○		区(03) 695-1111
文 京 区		毎年3、4月区報でお知らせ	区(03) 812-7111
江 戸 川 区	○		区(03) 652-1151
目 黒 区	○	毎年2月募集3月抽選、ただし中学生以下、又は60才以上の家族がいる家庭	区(03) 715-1111
豊 島 区	○	3月受付	区(03) 981-1111

市民農園の申し込みは、毎年2月から3月に行なわれています。忘れずにお問い合わせ欄の区・市役所または農協にご連絡ください。また、農園のない区・市の皆さんは農園設置について一度、区・市役所にご相談ください。東京都農協中央会では、設置したいという区・市役所からの相談をお受けしております。